

香川県埋蔵文化財センター年報

令和元年度

2021. 3

香川県埋蔵文化財センター

はじめに

香川県埋蔵文化財センターは、埋蔵文化財の調査及び研究を行うとともに、その保存と活用を図り、県民の文化的向上に資するため、昭和62年11月1日に設置されました。

令和元年度は、国道バイパス建設、県所管国道整備、県道整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査及び、国道バイパス建設、県所管国道整備、県道整備、都市計画道路整備、特別支援学校建設に伴う発掘調査の整理、報告書刊行をはじめ、出土品の保管、讃岐国府跡調査事業、香川県内遺跡発掘事業などを実施しました。そして、これらの調査や整理によって得られた多くの成果をもとに、展示や体験講座、考古学講座などの普及啓発業務を行い、埋蔵文化財の保護意識の向上に努めました。

本書は、令和元年度に実施した事業の内容をまとめたものです。本書が地域の歴史や文化の理解への一助になれば幸いです。

最後になりましたが、ご指導、ご協力をいただいた関係各位にお礼を申し上げますとともに、今後とも当センターの活動に皆様の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和3年3月

香川県埋蔵文化財センター

所長 西岡 達哉

目 次

はじめに

I 組織・施設・決算

1 香川県埋蔵文化財センターの組織	1
2 施設の概要	2
3 決算の状況	3

II 事業概要

1 埋蔵文化財調査事業	4
中山遺跡	6
沖遺跡	8
沖南遺跡	13
県道円座香南線建設に伴う埋蔵文化財調査（古田3号塚）（予備調査）	15
池内古田遺跡	18
池内御所原遺跡	21
2 普及・啓発事業	24
(1) 展示	24
(2) 現地説明会	24
(3) 講師の派遣	24
(4) 体験講座	25
(5) 発掘体験講座	25
(6) 考古学講座	26
(7) まいぶんボランティア活動	26
(8) 新聞記事掲載	26
(9) 資料の貸出・利用	26
(10) 職場体験学習・インターンシップ	26
(11) 刊行物	27
(12) ホームページ	27
(13) 資料の寄贈	27
3 木器保存処理	28
4 讲岐国府跡探索事業	31
(1) ボランティア活動	31
(2) 地域との交流	31
(3) 情報発信	31
(4) 関連行事	31
(5) 讲岐国府跡第37次調査成果の概要	32
5 香川県内遺跡発掘事業	42
今岡古墳	42
III 調査研究	
白鳥廃寺跡の伽藍配置と変遷－1～3次調査の再検討－	48

挿 図 目 次

第 1 図 発掘調査遺跡位置図	5
第 2 図 遺跡位置図 (1/25,000)	6
第 3 図 遺構配置図	7
第 4 図 遺跡位置図 (1/25,000)	8
第 5 図 古墳時代以前	10
第 6 図 鎌倉時代から江戸時代初期	11
第 7 図 遺跡位置図 (1/25,000)	13
第 8 図 遺構配置図	14
第 9 図 遺跡位置図 (1/25,000)	15
第 10 図 遺構配置図	16
第 11 図 遺跡位置図 (1/25,000)	18
第 12 図 遺構配置図	20
第 13 図 遺跡位置図 (1/25,000)	21
第 14 図 1 区遺構配置図	23
第 15 図 2 区遺構配置図	23
第 16 図 平成 30 ~ 31 年・令和元年度 下川津遺跡の斎串等小形木製品保存 処理経過	30
第 17 図 平成 30 年度 多肥宮尻遺跡・空港跡地遺跡他の小 形木製品保存処理経過	30
第 18 図 遺跡位置図 (1/25,000)	32
第 19 図 讃岐国府跡調査地	36
第 20 図 37-1~3、5 区 (地点 1) 1 面平面図	37
第 21 図 37-1~3、5 区 (地点 1) 2 面平面図	38
第 22 図 37-1~3、5 区 (地点 1) 3 面平面図	39
第 23 図 37-4 区 (地点 2) 平面図	40
第 24 図 遺跡位置図 (1/25,000)	42
第 25 図 トレンチ配置図	45
第 26 図 5 トレンチ平・断面図	46
第 27 図 前方部土質棺出土銅鏡実測図 (香川県 埋蔵文化財センター保管)	47
第 28 図 白鳥庵寺跡位置図 1	48
第 29 図 白鳥庵寺跡位置図 2	49
第 30 図 2・3 次調査 調査区位置図	51
第 31 図 塔基壇平面図	52
第 32 図 第 8 トレンチ・A トレンチ断面図	53
第 33 図 B トレンチ断面図	54
第 34 図 第 4 トレンチ (南東トレンチ) 断面図	55
第 35 図 第 5 トレンチ (南トレンチ)・第 4 トレンチ (北東コーナートレンチ) 断面図	56
第 36 図 第 2 トレンチ (北東深掘トレンチ)・第 1 トレンチ (北トレンチ) 断面図	59
第 37 図 第 8 トレンチ・A トレンチ・B トレンチ ・D トレンチ 出土遺物実測図	60
第 38 図 B トレンチ・C トレンチ 出土遺物実測図	61
第 39 図 第 7 トレンチ 出土遺物実測図 1	62
第 40 図 第 7 トレンチ 出土遺物実測図 2	63
第 41 図 第 7 トレンチ 出土遺物実測図 3	64
第 42 図 第 3 トレンチ 出土遺物実測図	66
第 43 図 第 3 トレンチ・塔基壇肩・第 4 トレンチ ・第 5 トレンチ・第 1 トレンチ 出土遺物 実測図	67
第 44 図 調査区不明 出土遺物実測図 1	68
第 45 図 調査区不明 出土遺物実測図 2	69
第 46 図 白鳥庵寺跡平面図	71
第 47 図 西方基壇・西方建物平面図	72
第 48 図 白鳥庵寺跡 伽藍配置変遷図 1 期	75
第 49 図 白鳥庵寺跡 伽藍配置変遷図 2-1 期	76
第 50 図 白鳥庵寺跡 伽藍配置変遷図 2-2 期	77
第 51 図 白鳥庵寺跡 伽藍配置変遷図 2-3 期	78
第 52 図 白鳥庵寺跡 軒瓦分類 (S=1/4 高松歴 史資料館編 1996)	79

写 真

写真 1	1 区完掘状況（東から）	6
写真 2	2 区 2 面完掘状況（東から）	6
写真 3	2 区 2 面の鋪溝群（北西から）	7
写真 4	2 区遺構面下の堆積状況（北東から）	7
写真 5	2 - 1 区（北から）	12
写真 6	2 - 3 区（南東から）	12
写真 7	3 - 1 区（北から）	12
写真 8	3 - 1 区（南から）	12
写真 9	3 - 3 区（北から）	12
写真 10	3 - 4 区（南東から）	12
写真 11	3 - 2 区（南西から）	12
写真 12	1 - 1 区第 1 遺構面（北から）	13
写真 13	1 - 2 区溝断面（東から）	13
写真 14	1 - 2 区（北から）	14
写真 15	1 - 3 区（東から）	14
写真 16	1 - 3 区（南から）	14
写真 17	5 トレンチ作業風景（南から）	15
写真 18	6 トレンチ作業風景（南から）	15
写真 19	9 トレンチ溝検出状況（北から）	17
写真 20	11 トレンチ柱穴群検出状況（南から）	17
写真 21	11 トレンチ完掘全景（北から）	17
写真 22	21 トレンチ完掘全景（南から）	17
写真 23	21 トレンチ大溝検出状況（西から）	17
写真 24	26 トレンチ完掘状況（南から）	17
写真 25	26 トレンチ溝土器出土状況（南から）	17
写真 26	33 トレンチ土坑検出状況（南から）	17
写真 27	1 区完掘状況（北西から）	18
写真 28	1 区溝群（北から）	18
写真 29	3 区全景（南から）	19
写真 30	3 区溝群（北から）	19
写真 31	4 区全景（北から）	19
写真 32	5 区全景（北から）	19
写真 33	2 区 SD2001（西から）	19
写真 34	2 区 SD2001（北から）	19
写真 35	1 区完掘状況（北東から）	22
写真 36	1 区 SD127（左）と SD102（右）（南西から）	22

目 次

写真 37	2 区完掘状況（南から）	22
写真 38	2 区溝内の遺物出土状況（南西から）	22
写真 39	2 区の主な遺構（北から）	22
写真 40	1 区作業風景（南西から）	22
写真 41	下川津遺跡出土 竹串他小形木製品 保存処理完了遺物（1）	29
写真 42	下川津遺跡出土 竹串他小形木製品 保存処理完了遺物（2）	30
写真 43	37-1 区 SD1042-1038 断面（南西から）	41
写真 44	37-3 区 建物 1 検出状況（南東から）	41
写真 45	37-3 区 建物 1 柱穴断面（南西から）	41
写真 46	37-4 区 全景写真（北西から）	41
写真 47	5 トレンチ全景（西から）	42
写真 48	5 トレンチ近景（西から、奥に石清尾山 を遠望）	43
写真 49	5 トレンチ近景（南西から）	43
写真 50	平坦面 2 上面遺物出土状況（西から）	43
写真 51	平坦面 2 土層（北東から）	43
写真 52	2 次調査 遠景（南西から）	83
写真 53	2 次調査 遠景（西から）	83
写真 54	2 次調査 南トレンチ調査状況（南から）	83
写真 55	2 次調査 南東トレンチ調査状況（南から）	84
写真 56	2 次調査 南東トレンチ調査状況（南から）	84
写真 57	2 次調査 列石（南から）	84
写真 58	2 次調査 列石（西から）	85
写真 59	2 次調査 塔基壇東部 瓦	85
写真 60	2 次調査 塔基壇南辺調査状況（南から）	85
写真 61	2 次調査 塔基壇南辺調査状況（東から）	86

写真 62	2次調査 塔基壇南辺石積(南から)	86
写真 63	2次調査 塔基壇南辺石積(南から)	86
写真 64	2次調査 塔基壇南辺石積・瓦(西から)	87
写真 65	2次調査 塔基壇南辺石積・瓦(東から)	87
写真 66	2次調査 塔基壇南辺石積・瓦(南から)	87
写真 67	2次調査 塔基壇南辺断面(西から)	88
写真 68	2次調査 塔基壇南東隅石積・瓦(南から)	88
写真 69	2次調査 塔基壇東辺瓦(北から)	88
写真 70	2次調査 塔基壇東辺瓦(南から)	89
写真 71	2次調査 塔基壇東辺 調査状況(北から)	89
写真 72	2次調査 塔基壇南辺・東辺(南から)	89
写真 73	2次調査 塔基壇南辺・東辺 石積(南から)	90
写真 74	2次調査 塔基壇東辺 石積(東から)	90
写真 75	2次調査 塔基壇南辺・東辺 石積(北から)	90
写真 76	2次調査 石列(南から)	91
写真 77	2次調査 塔基壇面(南から)	91
写真 78	2次調査 軒平瓦出土状況	91

表 目 次

第1表	職員一覧	2
第2表	発掘調査決算	3
第3表	整理・報告決算	3
第4表	管理運営費等決算	3
第5表	発掘調査遺跡一覧	4
第6表	遺跡の概要一覧	4
第7表	整理・報告遺跡一覧	5
第8表	刊行報告書一覧	5
第9表	展示一覧	24
第10表	入館者数一覧	24
第11表	センター外展示一覧	24
第12表	現地説明会一覧	24
第13表	体験講座への講師派遣一覧	24
第14表	講演等への講師派遣一覧	25
第15表	体験講座実施事業一覧	25
第16表	発掘体験講座	25
第17表	考古学講座	26
第18表	資料貸出・利用一覧(数字は件数)	26
第19表	職場体験学習・インターンシップ一覧	26
第20表	PEGによる保存処理および処理経過一覧	28
第21表	地域との交流一覧	31
第22表	情報発信一覧	31
第23表	関連行事一覧	31
第24表	白鳥廃寺跡出土瓦観察表	80~82
第25表	白鳥廃寺跡出土土器観察表	82

(註)

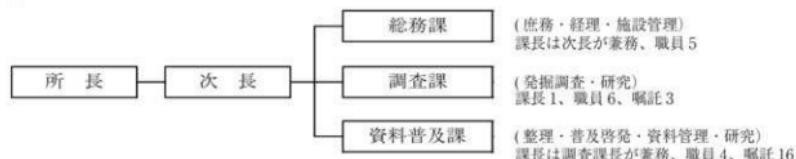
- 本書で用いる座標系は世界測地系(国土地理院第IV系)で、標高は東京湾平均海面を基準とした。
- 遺構は次の略号により表示した。

SH	堅穴建物	SB	掘立柱建物	SP	柱穴・小穴	SK	土坑	SE	井戸	SD	溝
SR	旧河道	SX	性格不明遺構	SF	竈						
- 遺跡位置図は国土地理院地形図(1/25,000)に遺跡位置を追記して掲載した。

I 組織・施設・決算

1 香川県埋蔵文化財センターの組織

(1) 組織



(2) 職 員

平成31年4月1日現在

所 属	職 名	氏 名
所 長	西岡 達哉	
次 長	石野 高雄	
総務課	課長（兼務）	石野 高雄
	副主幹	斎藤 政好
	主任	高橋 範行
	主任	丸尾 麻知子
	主任	寺尾 一夫
	主任	横井 隆史
調査課	課長	古野 徳久
	主任文化財専門員	藏本 晋司
	文化財専門員	森下 友子
	文化財専門員	山元 素子
	文化財専門員	宮崎 哲治
	主任	熊野 博実
	技師	益崎 卓己
	嘱託	今井 由佳
	嘱託	名倉 美保
	嘱託	濱田 邦彦
資料普及課	課長（兼務）	古野 徳久
	主任文化財専門員	森下 英治
	主任文化財専門員	乗松 真也
	文化財専門員	長井 博志
	技師	竹内 裕貴

資料普及課	嘱託	竹内 悅子
	嘱託	北濱 敦子
	嘱託	畠 美香
	嘱託	小早川真由美
	嘱託	土井 美穂
	嘱託	宮崎 直子
	嘱託	大山 和子
	嘱託	加藤 恵子
	嘱託	小林 奈充子
	嘱託	中野 優美
	嘱託	山本 基公美
	嘱託	佐立 晶子
	嘱託	池内 妙子
	嘱託	大林 真沙代
	嘱託	森 后代
	嘱託	池田 匠

第1表 職員一覧

2 施設の概要

(1) 所在地 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4

(2) 敷地面積 11,049.23m²

(3) 建物構造・延床面積

①本館	鉄筋コンクリート造・2階建 (一部鉄骨造・平屋建)	1,362.23m ²
②分館	軽量鉄骨造・2階建	337.35m ²
③第1収蔵庫	鉄骨造・2階建	1,525.32m ²
④第2収蔵庫	鉄骨造・3階建	2,040.33m ²
⑤車庫	鉄骨造・平屋建	29.97m ²
⑥自転車置場	鉄骨造・平屋建	25.00m ²

3 決算の状況

(単位:千円)

原因者	遺跡名	決算
国土交通省	中山遺跡	20,519
道路課	円座香南線 沖遺跡、沖南遺跡	37,161 28,881

※職員人件費は除く。

第2表 発掘調査決算

(単位:千円)

原因者	遺跡名	決算
国土交通省	山下岡前遺跡	5,157
	湊山下遺跡	2,880
	三殿北遺跡	567
道路課	六条下所遺跡	9,290
	名遺跡	11,555
	北野遺跡、鎌野西遺跡	715
	津森位遺跡	465
	中又北遺跡	1,203
	旧練兵場遺跡	28,711
特別支援教育課	本町二丁目遺跡	104

※職員人件費は除く。

第3表 整理・報告決算

(単位:千円)

事業名	決算
管理運営費等	管理運営費
	職員給与費
	讃岐国府跡調査事業
合計	145,245

第4表 管理運営費等決算

II 事業概要

1 埋蔵文化財調査事業

発掘調査を分掌する調査課では調査班2班を編成し、国道バイパス建設、県所管国道整備、県道整備に伴い計5遺跡の発掘調査を行った。

一方、報告書作成を分掌する資料普及課では整理班2班を編成し、国道バイパス建設、県所管国道整備、県道整備、都市計画道路整備、特別支援学校建設に伴う5遺跡の整理及び5冊の報告書の刊行を行った。

原因者	事業名	遺跡名	所在地	調査面積 (m ²)	調査期間
国土交通省	国道 11号大内白鳥バイパス	中山遺跡	東かがわ市土居	1,099	8月～10月
道路課	国道 438号	沖遺跡	丸亀市飯山町	1,112	4月～9月
		沖南遺跡	丸亀市飯山町	96	7月
	県道円座香南線	県道円座香南線建設に伴う埋蔵文化財調査（古田3号塚）（予備調査）	高松市香南町	事業対象面積約 25,000	4月～6月・11月
		池内古田遺跡	高松市香南町		10月～1月
		池内御所原遺跡	高松市香南町	1,020	2月～3月

第5表 発掘調査遺跡一覧

遺跡名	遺跡の概要	主な遺構・遺物
中山遺跡	中世の生産遺跡	土師質土器、宋銭
沖遺跡	古墳時代の集落遺跡	古墳時代の堅穴建物、溝
	鎌倉～江戸時代の集落遺跡	須恵器、土師器 鎌倉時代～江戸時代の周辺の条里地割に平行する溝群 土師質土器、陶磁器
沖南遺跡	鎌倉時代の集落遺跡	鎌倉時代の周辺の条里地割に平行する溝 土師質土器、瓦器
池内古田遺跡	中世～近世の集落遺跡	中世～近世の溝 土師質土器、瓦質土器 近世の掘立柱建物 土師質土器、陶磁器、曲物
池内御所原遺跡	中世以降の生産遺跡	中世以降の溝 土師質土器

第6表 遺跡の概要一覧

原因者	遺跡名	所在地	整理期間
国土交通省	山下岡前遺跡	東かがわ市湊	6月～12月
	湊山下古墳	東かがわ市湊	6・7月
	三殿北遺跡	東かがわ市三殿	報告書刊行（前年度整理）
道路課	六条下所遺跡	高松市六条町	4・5・1～3月
	名遺跡	丸亀市飯山町	11～3月
	北野遺跡	高松市三谷町	報告書刊行（前年度整理）
	鎌野西遺跡	高松市三谷町	報告書刊行（前年度整理）
	中又北遺跡	多度津町	報告書刊行（前年度整理）
	津森位遺跡	丸亀市津森町	報告書刊行（前年度整理）
都市計画課	本町二丁目遺跡	坂出市本町	報告書刊行（前年度整理）
特別支援教育課	旧練兵場遺跡	普通寺市仙遊町	4～3月

第7表 整理・報告遺跡一覧

書名
国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊 三殿北遺跡
県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 北野遺跡 鎌野西遺跡
県道多度津丸亀線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 中又北遺跡
県道高松丸亀線（丸亀工区）緊急地方道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 津森位遺跡Ⅱ
都市計画道路事業富士見線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 本町二丁目遺跡
香川県埋蔵文化財センター年報 平成30年度
埋蔵文化財試掘調査報告 31－平成30年度香川県内遺跡発掘調査－

第8表 刊行報告書一覧



第1図 発掘調査遺跡位置図

なかやま 中山遺跡

中山遺跡は、東かがわ市土居に位置し、国道11号大内白鳥バイパス建設に伴い令和元年8月1日から10月31日の期間で発掘調査を実施した。

今回の調査地はバイパスと県道の接続部で川の付け替え工事が急ぐことから、橋脚を施工する部分を中心とした1,099m²を対象としている。

遺跡の周辺には南海道の可能性がある道路側溝が見つかった坪井遺跡や、中世の集落跡である三殿北遺跡、江戸時代の砂糖生産に使った龜が見つかった三殿出口遺跡などが知られている。

遺跡は東かがわ市とさぬき市にまたがる山塊に北川が開削した谷の出口付近に位置し、現在は水田として土地が利用されている。対象地を含めた周辺は北川に向かって2段の河岸段丘が形成されており、川に隣接することや試掘の結果から居住域ではなく生産域にあたることが予想された。

調査の結果、1区（調査区南半）では耕作土、中世以降の包含層の下部にベース層となる粗砂～シルト層が広がり、その上面で北川の流下する方向と一致した溝、鋤溝、取水を目的としたと思われる素掘りの土坑を確認した。遺構からの出土遺物は少ないが、土坑からは土師質土器に混じって宋銭の破片が出土しており、おおむね中世の遺構群であると判断できる。



第2図 遺跡位置図 (1/25,000)



写真1 1区完堀状況（東から）



写真2 2区2面完堀状況（東から）

2区（調査区北半）のうち1区に近い部分は同様の堆積状況が連続して遺構はほとんど見られないのに対し、2区北半の一段高い部分では遺構面が2面認められた。上位では溝が2条だけであるのに対し、下位では鋤溝を中心とした遺構がやや集中する傾向がみられた。溝の方向から概ね2グループに分類されるが、時期差を反映するものかどうかを決定づけるような土器類は出土しなかつたため、その判断は今後の調査に委ねたい。

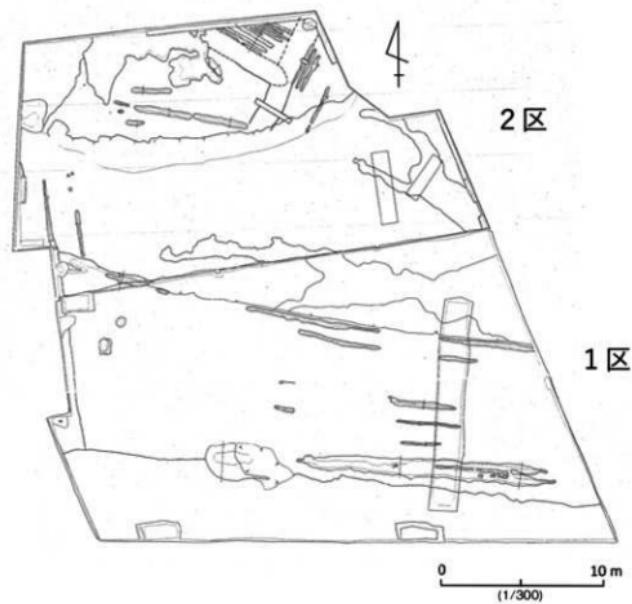
1・2区それぞれで下層確認のトレンチ調査を行ったが、いずれも粗砂～細砂の分厚い堆積がみられ、北川が氾濫を繰り返しながら河床を下げていったことが判明した。わずか1点ではあるが、砂から弥生時代に属するとみられるサヌカイト製の打製石包丁が出土していることから、北川の上流域には当該期の遺跡の存在がうかがわれる。中世の遺構のベース層は砂で保水力がないことから、検出した鋤溝は畑

の畝間の小溝の可能性が高い。近世以降は粘質土を入れて水田に転じたことが推定される。(宮崎)



写真4 2区遺構面下の堆積状況（北東から）

写真3 2区2面の鉢溝群（北西から）



第3図 遺構配置図

沖遺跡

沖遺跡は丸亀市飯山町上法軍寺に所在する。国道438号道路改良工事に伴い令和元年4月1日～9月30日の期間で発掘調査を実施した。対象面積は1,112m²である。本遺跡は丸亀平野東部、大東川の南岸に位置し、周辺には北から西に30°傾く方向をもとにした区画の条里地割が広がる。約300m北には、古墳時代後期の竪穴建物跡や古代の掘立柱建物跡や水田跡を検出した名遺跡がある。

沖遺跡は平成30年度に道路東端の側溝部分（幅2m）の調査を実施し、令和元年度は平成30年度調査区の西側を調査した。沖遺跡の中央部分には南北に延びる市道があるが、市道東側の調査区は北から23区・2-1区・2-2区・2-4区、市道西側の調査区は北から3-4区・3-5区・3-3区・3-1区・3-2区と呼称した。

いずれの調査区も耕作土の下には褐灰色砂質シルト層が堆積し、その下には黒褐色粘土層、黄色粘土層が堆積しており、褐灰色砂質シルト層の上面（1面）、黒褐色粘土層上面（2面）、黄色粘土層上面（3面）で遺構を検出した。北方にある名遺跡では黒褐色粘土層上面で水田跡を検出したことから、沖遺跡ではこの土層に類似する黒褐色粘土層上面（2面）で遺構検出を行ったが、水田跡は検出されなかった。1面では古墳時代から中世の掘立柱建物跡や溝状造構、古代以前の河川跡を検出した。2面では遺構は検出できなかった。3面では弥生時代後期のものと考えられる溝状造構を検出した。なお、北部の3-3区では褐灰色砂質シルト層の堆積はみられず、黒褐色粘土層上面と黄色粘土層上面の2面の調査を行った。また、市道の東側で最北部の2-3区では耕作土直下には黄色粘土層がみられ、褐灰色砂質シルト層や黒褐色粘土層の堆積はみられず、黄色粘土層上面で遺構検出を行った。市道の西側で、最北部の3-4区では東部に厚さ5cmほどの黒色粘土層、その下には黄色粘土層が堆積しており、2面の調査を行ったが、中央から西部及び、3-4区の西側の3-5区では黒色粘土層の堆積はみられず、黄色粘土層上面の1面の調査を行った。

弥生時代以前

弥生時代以前の遺構は少ない。3-2区で検出された溝状造構SD3022、3-3区の2面で検出された溝状造構SD3054がある。SD3022は蛇行しながら東西に走る。平成30年度調査した1-3区で検出した溝状造構SD1017と埋土が類似することから、連続すると考えられ、弥生時代後期のものと考えられる。SD3054は2-3区の溝状造構SD2004に連続する。遺物は出土しなかったので、詳細な時期は不明であるが、弥生時代以前のものと考えられる。

古墳時代

溝状造構12条、竪穴状造構1基、河川跡2条が検出された。3-3区の溝状造構SD3046は市道東側の2-1区で検出されたSD1001に連続する可能性が高い。2-1区SD1005は古墳時代中期から後期の溝状造

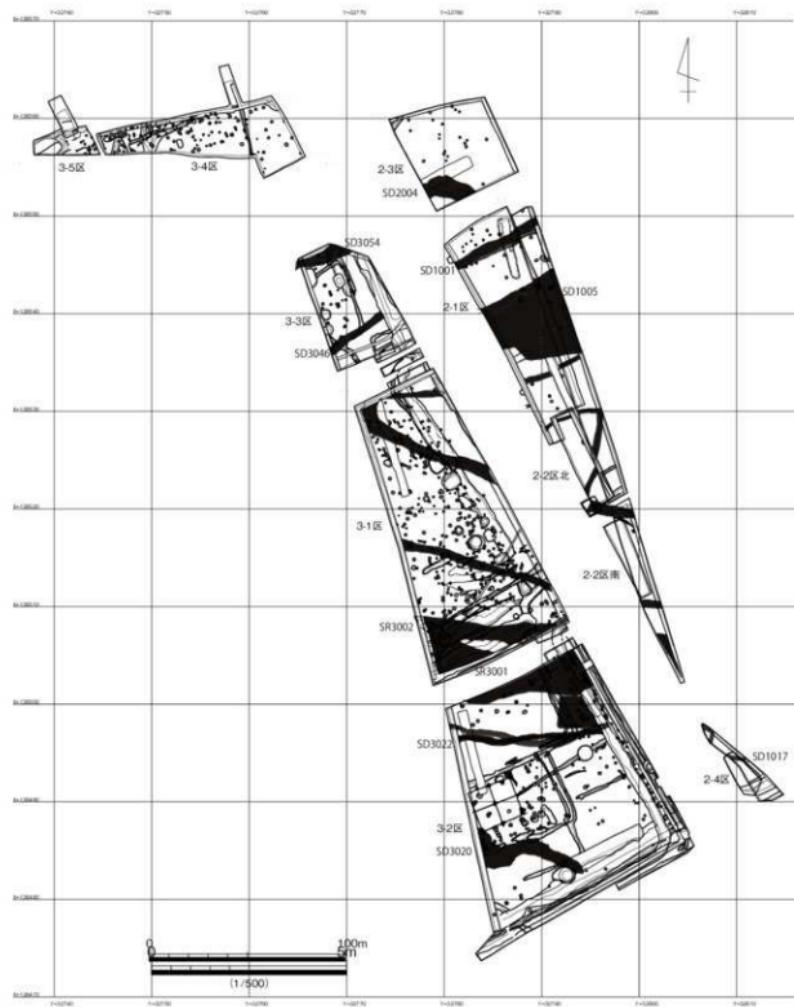


第4図 遺跡位置図 (1/25,000)

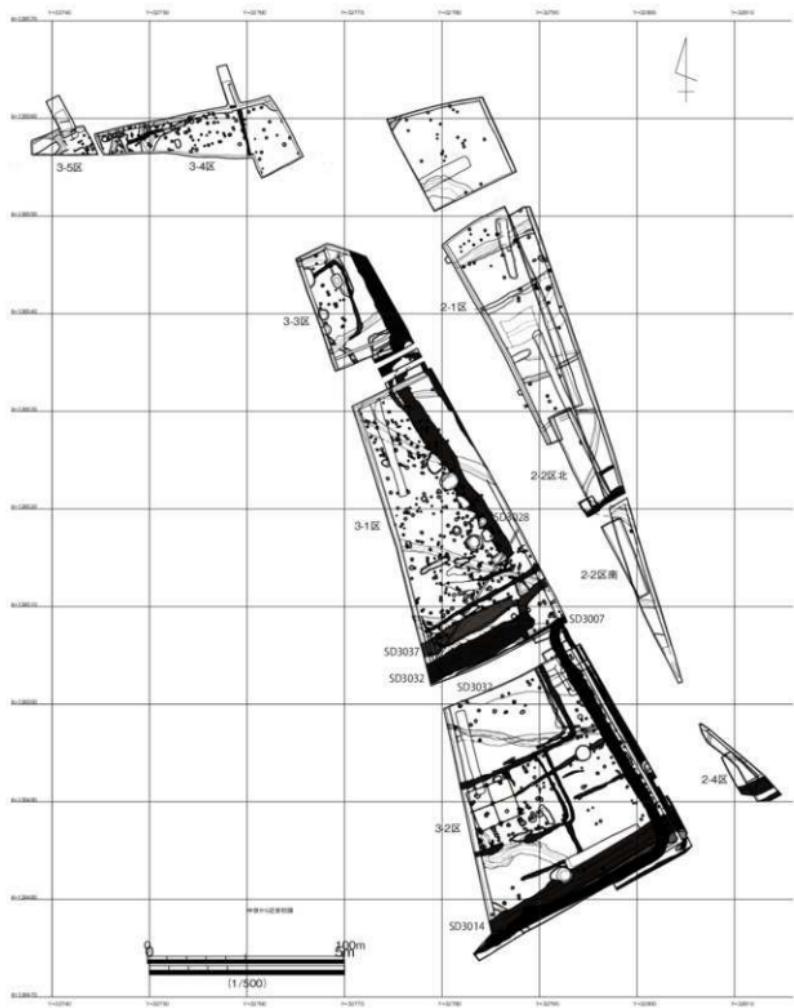
構で、幅8m、深さ0.9mである。土師器数点が出土した。そのほか、北西から南東に向かって、数条の溝状遺構が検出された。いずれの遺構も遺物の出土量は少ない。3-2区南部で検出されたSD3020は幅0.5～1.0m、深さ0.4～0.5mで、北西から南東に蛇行しながら向かい、中世の溝状遺構SD3014に削平される。埋土は細砂で、土師器壺など少量の土器片が出土した。この遺構は自然流路の可能性が高い。また、3-1区から3-2区では北西から南東方向の2条の河川跡(SR3001・SR3002)が検出された。南側のSR3001のはうが新しい。土器片・須恵器片が少量出土した。

鎌倉時代から江戸時代前半

周辺にみられる条里地割に平行する溝状遺構が30条程度検出された。最も南に位置する3-2区の南端と東端では数条の溝状遺構が重複して検出された。なお、3-2区の南側は東西に走る市道があり、この市道は周辺の条里地割に合致する。3-2区の南部を西から東に向かうSD3007は調査区南東隅で北に直角に曲がり、3-2区の北側の3-1区の南東隅で東に向かう。また、3-1区で検出された南から北に向かう溝状遺構SD3028は3-1区と3-3区の境界付近で東のはうに向かう。南から北に向かう溝状遺構は連続せず、東に方向を変えるが、市道東側の2-1区・2-2区では連続すると考えられる溝状遺構は検出されなかった。また、3-1区南部には東西方向の溝状遺構SD3032・SD3037がある。SD3032・SD3037は南北方向のSD3007とL字状に配置され、その内側には掘立柱建物を構成すると考えられる多数の柱穴跡が検出された。これらの溝状遺構からは鎌倉時代から江戸時代初期の陶磁器・土師質土器・柱穴跡は土師質土器が少量出土した。これらの出土遺物から沖遺跡では周辺にみられる条里地割に平行する溝状遺構は鎌倉時代に掘削されたものと考えられる。(森下友)



第5図 古墳時代以前



第6図 鎌倉時代から江戸時代初期



写真5 2-1区（北から）



写真6 2-3区（南東から）



写真7 3-1区（北から）



写真8 3-1区（南から）



写真9 3-3区（北から）



写真10 3-4区（南東から）



写真11 3-2区（南西から）

沖南遺跡

沖南遺跡は丸亀市飯山町上法軍寺に所在する。国道438号道路整備工事に伴い、令和元年7月に発掘調査を実施した。調査は、道路の擁壁部分幅2mについて先行して行ったもので、調査対象面積は96m²である。

遺跡の約200m北側には大東川が流れ、南側には台地が迫る。周辺は水田地帯で条里地割がよく残る地域である。北東約500mには奈良時代に創建された法勧寺がある。北約500mにある名遺跡では古墳時代後期の堅穴建物や古代の水田跡、中世の溝群が、北150mにある沖遺跡では条里地割に平行する中世の溝群が見つかっている。

調査は北側から1-1-1-3区として実施した。試掘調査の結果から、遺構面2面を想定して実施した。1-1-1・2区では、耕作土下約80cm~1mで第1遺構面である灰黄褐色粘土層を、その下部20~50cmで第2遺構面である明黄褐色粘土層（基盤層）を検出した。1-1-2区は湿地状を呈し、調査中も湧水が絶えなかった。第1遺構面を形成する灰黄褐色粘土層は南側の1-3区へ近づくに従い薄くなり、1-3区では微高地となり、第1遺構面は消滅する。

1-1-2区では第1遺構面で東西方向の溝をそれぞれ1条検出した。いずれも周辺の条里地割とは方向が異なる。1-2区で検出した溝は幅135cm、深さ70cmを測る。時期のわかる出土遺物はなく、条里地割施工以前であること以外に時期は不明であるが、規模から基幹的な水路の役割を果たしたと考えられる。

1-3区では、低湿地から微高地へ変化する境界付近で、条里地割と同方向の東西方向の溝を3条検出した。このうちの1条からは土師質土器榠、瓦器榠、瓦などが出土し、出土遺物から13世紀頃と考えられる。3区で検出した溝の南側では微高地が広がることが予想され、次年度以降の調査成果が期待される。（山元）



第7図 遺跡位置図 (1/25,000)



写真12 1-1区第1遺構面（北から）



写真13 1-2区溝断面（東から）



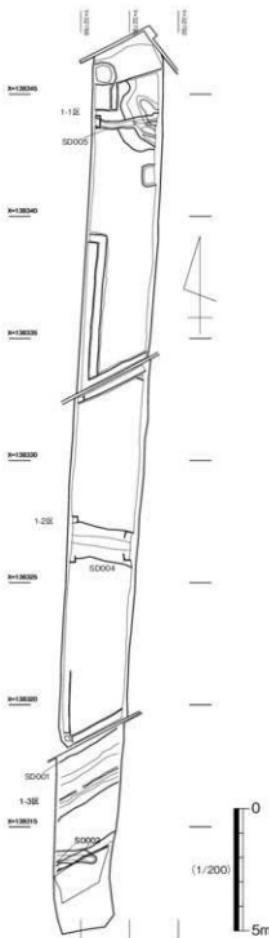
写真 14 1-2区（北から）



写真 15 1-3区（東から）



写真 16 1-3区（南から）



第8図 遺構配置図

県道円座香南線建設に伴う埋蔵文化財調査（古田3号塚）（予備調査）

県道円座香南線は高松自動車道高松西インターチェンジと高松空港を結ぶ路線として計画され、既に北から順次工事が行われ部分的ではあるが供用が開始されている。残る香南工区約1.2kmの工事計画が持ち上がり路線内の埋蔵文化財包蔵状況を確認する必要が生じたため、令和元年4月1日から6月30日の期間で、予備調査を実施した。路線内に周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しなかったため、近接した古田3号塚の名称を使用している。

調査は基本的に宅地・農地等の1区画につき幅2mのトレンチを2本以上設定し、遺構面・旧地表面までは小型の重機で掘り下げ、その後は作業員による掘り下げ、壁面清掃などを行う形で行った。

なお、水田耕作により上記期間に調査が実施できなかった部分のうち2か所については、同年11月にトレンチ調査を実施した。

調査の結果、7トレンチ南半から11トレンチにかけて中世から近世にかけての柱穴群、溝群、21トレンチで時期不明の大溝、26トレンチで中世の土師器杯が出土した溝、33トレンチで古代の須恵器片が出土した土坑などを確認した。

当該地一帯は昭和時代の農業基盤整備事業により大規模な土地の切り盛りが行われており、旧地形の微高地部分は耕作土直下に削平を受けた地山層が露出するような状態で、旧地表面は失われている箇所が多くあった。路線内に存在した小開析谷部分は比較的旧地形をとどめていたが、遺構・遺物はほとんど確認することができなかった。

以上の結果から、7トレンチ南半から11トレンチの範囲2,380m²については「池内古田遺跡」、21・26トレンチ部分の1,020m²については「池内御所原遺跡」、33トレンチ部分の1,287m²については「上道池東遺跡」として、それぞれ事業に先立つ事前の保護措置が必要であると判断した。

なお、「上道池東遺跡」の隣接地には民家が集中している部分があり、移転・撤去後に同様の確認調査を実施する必要がある。（宮崎）



第9図 遺跡位置図(1/25,000)



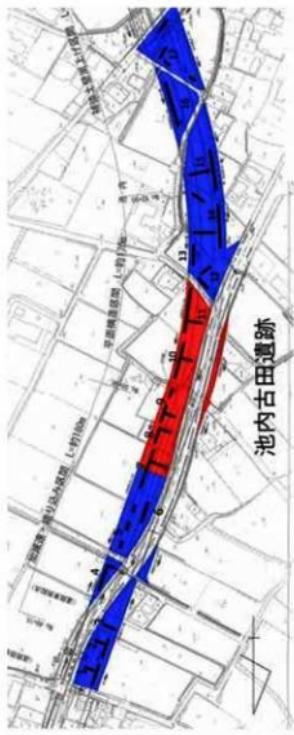
写真17 5トレンチ作業風景（南から）



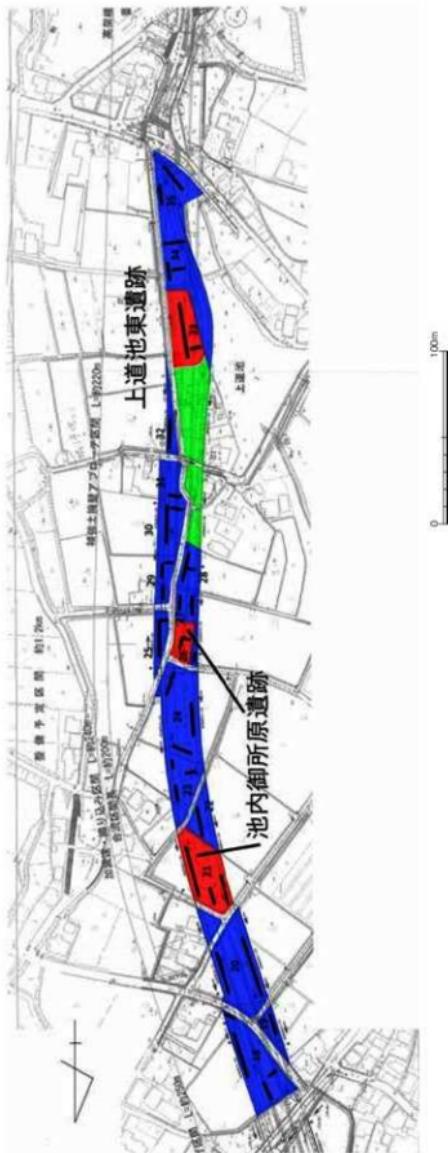
写真18 6トレンチ作業風景（南から）

凡例

- 保護措置必要範囲………赤
- 保護措置不要範囲………青
- 今後調査が必要な範囲………緑
- 黒線はトレーンチを示す



池内古田遺跡



池内御所原遺跡

第10図 遺構配置図



写真 19 9 トレンチ溝検出状況（北から）



写真 20 11 トレンチ柱穴群検出状況（南から）



写真 21 11 トレンチ完堀全景（北から）



写真 22 21 トレンチ完堀全景（南から）



写真 23 21 トレンチ大溝検出状況（西から）



写真 24 26 トレンチ完堀状況（南から）



写真 25 26 トレンチ溝土器出土状況（南から）



写真 26 33 トレンチ土坑検出状況（南から）

いけのうちこでん 池内古田遺跡

池内古田遺跡は、高松市香南町池内に位置する。県道円座香南線建設に伴い、令和元年10月1日から令和2年1月31日に発掘調査を行った。調査面積は2,380m²である。

調査地は高松平野の南端部の洪積台地上に立地し、南から北へ傾斜する。周辺は昭和時代に大規模なほ場整備を行っており、細かい土地の起伏は失われている。調査区は北から1～5区を設定した。

調査の結果、3～5区では耕作土・旧耕土などの下部で黄色粘土である基盤層、1・2区では、東部と西端付近では耕作土等の下部に黄色粘土である基盤層を検出した。1・2区の中央付近は暗褐色粘質土を主体とした包含層の堆積が認められ、低湿地であったと考えられる。1～5区にかけては中世の溝群を、3区南半～5区にかけては江戸時代以降のピット群、井戸、溝などを検出した。

中世の溝群は1区～5区で検出した。4～5区では削平のため溝の遺存状態は悪かったが、3区～1区では4条の溝が近接・重複し、屈曲しながら北流し、1・2区では、東側の微高地と包含層が堆積する低地の境付近を北流する。これらの溝から13世紀代の土師質土器足釜、杯が出土し、この時期を中心に機能していたと考えられる。溝がほぼ同位置で重複して検出されたことから、長期間、水路の機能が維持されたことが窺える。また、これらの溝に先行して、3区南東端から2区北西端へ向けて横断し、1区の西端、西側の微高地と低地の境付近を北流する溝を検出した。12世紀代の須恵器甕、こね鉢、土師質土器足釜等が集中して出土し、この時期の溝と考えられる。

3区南半～5区にかけてはピット群、井戸などを検出した。ピット群は、13世紀代の溝を掘り込み、近世の陶磁器が出土する。井戸の最底部からは18世紀代の陶器椀や擂鉢などが出土しており、18世紀代の集落と考えられる。

今回の発掘調査からは古代以前の遺構・遺物などは見つからず、この時期には開発は及んでいなかつたと考えられる。12世紀代以降に溝群が掘削を繰り返しながら維持されたことから、この頃から生産活動が始まり、江戸時代以降には集落が営まれるようになったと考えられる。(山元)



第11図 遺跡位置図 (1/25,000)



写真27 1区完堀状況（北西から）



写真28 1区溝群（北から）



写真 29 3区全景（南から）



写真 30 3区溝群（北から）



写真 31 4区全景（北から）



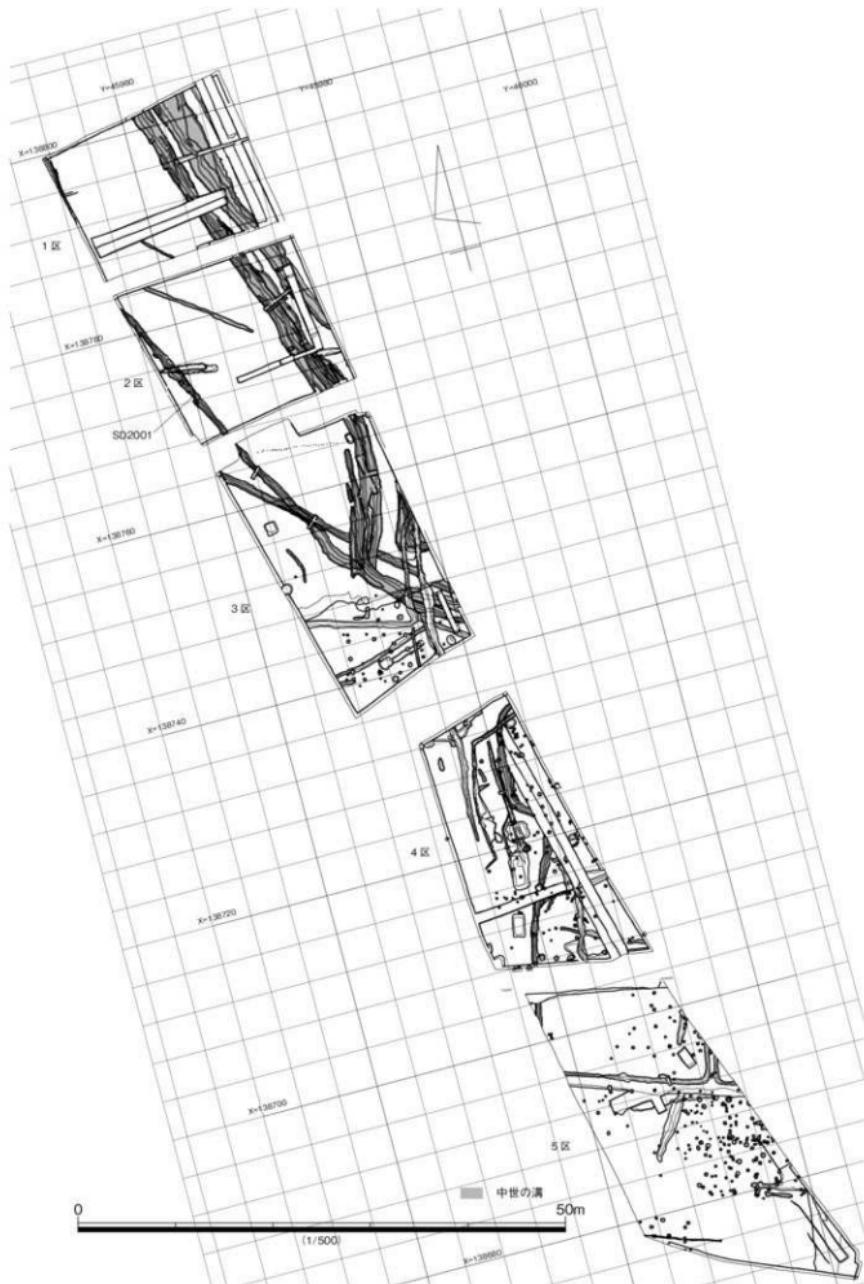
写真 32 5区全景（北から）



写真 33 2区 SD2001（西から）



写真 34 2区 SD2001（北から）



第 12 図 遺構配置図

いけのうちごしょばら 池内御所原遺跡

池内御所原遺跡は、高松市香南町池内に位置し、県道円座香南線建設に伴い、令和2年2月1日から3月31日の期間で発掘調査を実施した。調査対象地は約160m離れた2地点で、調査面積は合わせて1,020m²を測る。

遺跡の周辺に周知の埋蔵文化財包蔵地は少なく、やや離れた場所に中世の塚や石造物、散布地が存在する程度である。

遺跡は高松平野の南端に接する洪積台地上に位置している。台地上は小河川の開析などで微起伏が認められるが、昭和時代の農業基盤整備に伴う土地造成により北へ傾斜する緩やかな階段状の田畠が広がっている。

調査の結果、それぞれの調査区で溝を中心とした遺構を確認した。耕作土直下で上面が水平な基盤層（黄褐色粘土）がみられるほど後世の削平を受けており、遺構が掘られた当時の地面は失われている。

北の調査区（1区）の遺構で特筆すべきは、検出幅約1.6m、深さ約1.2mを測るほぼ同規模の2条の溝である。試掘時には弧を描く1条の溝と推定したが、時期の異なる2条の溝であることが判明した。先行する溝SD127は断面形状が逆三角形を呈し、最深部は人間が片足で立つのがやっとなまでに狭い。やや蛇行しながら南西-北東方向を有する。後出する溝SD102は断面が逆台形を呈し、緩やかに弧を描きながら南西-東方向を有する。南西約3分の1は先行するSD127と一致しており、一部を掘り直して使用しているようである。どちらの溝も遺物の出土量が極めて少ないため詳細な時期の比定は困難だが、土師質土器小片の存在から中世以降と推定しておく。

南の調査区（2区）は小溝や土坑を検出したが、後世の削平を受けて溝は南半を消失している。出土遺物量は僅少で、中央の溝底部から中世の土師器杯3点がみられる程度であった。

今回の調査対象地は、溝を中心とした遺構や出土遺物の少なさなどから、中世以降の生産域（水田・畑など）である可能性が高い。近辺に居住域が存在することが想定されるため、今後の開発行為に対しても適切な対応が必要と思われる。また、両調査区に部分的に残存した包含層からは弥生時代のものとみられる打製石鎌が数点出土しており、遺跡周辺に同時代の遺跡が存在する可能性がある。（宮崎）



第13図 遺跡位置図 (1/25,000)



写真 35 1区完掘状況（北東から）



写真 36 1区 SD127(左)と SD102(右)(南西から)



写真 37 2区完堀状況（南から）



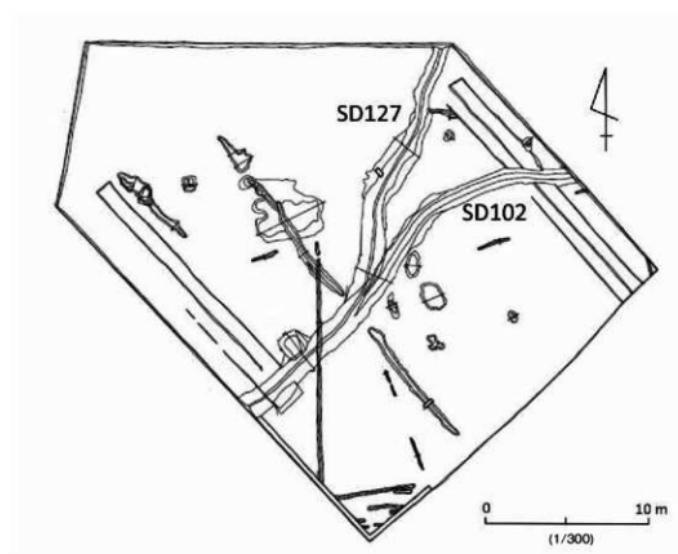
写真 38 2区溝内の遺物出土状況（南西から）



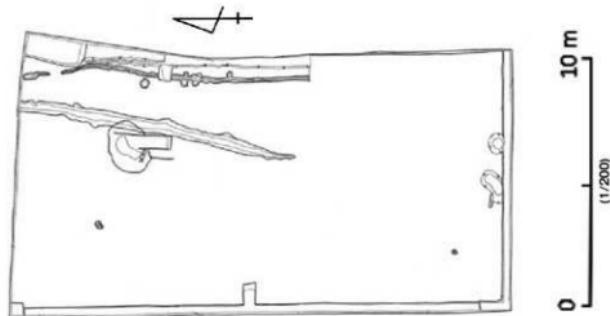
写真 39 2区の主な遺構（北から）



写真 40 1区作業風景（南西から）



第 14 図 1 区遺構配置図



第 15 図 2 区遺構配置図

2 普及・啓発事業

(1) 展示

① 香川県埋蔵文化財センターでの展示

タイトル		場所	会期
遺跡・遺物からみた香川の歴史		第1展示室	4月1日～3月31日
讃岐国府跡を探る10		第2展示室	4月1日～5月14日
平成30年度発掘調査速報展&オシャレの考古学－古代人を彩ったアクセサリー		第2展示室	5月29日～7月12日
弥生土器のミカター土器から読み解く弥生人のくらしと交流		第2展示室	7月22日～9月25日
第1回四国地区埋蔵文化財センター発掘へんろ展 海と人々1		第2展示室	10月1日～12月13日
讃岐国府ヒストリヤー過去・現在・そして未来ー		第2展示室	1月6日～3月31日

第9表 展示一覧

一般			団体								合計		
大人	子ども	計	団体数				構成員数				合計		
			一般	高校生	小・中学生	幼稚園	計	一般	高校生	小・中学生	幼稚園		
1112	57	1,169	10	0	5	0	15	286	0	265	0	551	1,720

第10表 入館者数一覧

単位：人

② 香川県埋蔵文化財センター以外の施設での展示

タイトル		場所	会期	観覧者数(人)
讃岐国府跡を探る10		高松市讃岐国分寺跡資料館	5月21日～7月7日	458
讃岐国府跡を探る10		三豊市宗吉かわらの里展示館	7月17日～8月25日	942
讃岐国府跡を探る10		府中湖カヌー研修センター	10月5・6日	6,000
讃岐国府跡を探る10		坂出市郷土資料館	11月6日～11月28日	120
讃岐国府跡を探る10		觀音寺市中央図書館	12月3日～12月15日	200
讃岐国府跡を探る10		香川県立図書館	1月21日～3月1日	1,101
讃岐国府跡を探る10		坂出市役所	2月17日～3月6日	800
讃岐国府跡を探る10		綾川町立生涯学習センター	2月18日～3月5日	1,438
第1回四国地区埋蔵文化財センター発掘へんろ展 海と人々1		松山市考古館	4月27日～7月7日	6,344
		高知県埋蔵文化財センター	7月14日～9月23日	1,538
		徳島県立埋蔵文化財総合センター	1月10日～3月15日	1,811
合 計				20,752

第11表 センター外展示一覧

(2) 現地説明会

番号	内 容	実 施 日	対 象	参 加 者 数 (人)
1	沖縄路現地説明会	6月29日	一般	60
2	池内古田遺跡現地説明会	1月25日	一般	40
3	讃岐国府跡現地説明会	2月9日	一般	220
合 計				320

第12表 現地説明会一覧

(3) 講師の派遣

① 体験講座など

番号	依頼者	実 施 日	場 所	内 容	対 象	人 数 (人)
1	讃田共済会郷土博物館	7月27日	讃田共済会郷土博物館	勾玉作り	一般	31
2	古代アートマジック実行委員会	8月18日	国分寺ホール	勾玉作り	一般	40
3	まんのう町教育委員会	11月24日	琴南ふるさと資料館	土器作り・土製品作り	一般	132
4	むきばんだ史跡公園	12月15日	鳥取県立むきばんだ史跡公園	分鏡影づくりアート作り	一般	25
5	まんのう町教育委員会	2月22日	琴南ふるさと資料館	土器焼き	一般	12
合 計						240

第13表 体験講座への講師派遣一覧

(2) その他

	依頼者	実施日	内 容
1	川東小学校	4月 26日	校外学習
2	普通寺市文化財保護協会	5月 15日	講演
3	丸亀市立中央図書館	5月 19日	講演
4	坂出市文化協会	5月 26日	講演
5	讃岐国分寺跡資料館友の会	6月 1日	講演
6	香川県立中央病院むつみ会	7月 6日	講演
7	114銀行プレミアムサロン	8月 22日	講演
8	讃岐国分寺跡資料館友の会	8月 24日	講演
9	讃岐国分寺跡資料館友の会	9月 28日	道跡案内
10	府中湖水のフェスティバル実行委員会	10月 5日	道跡案内
11	讃岐国分寺跡資料館友の会	10月 26日	道跡案内
12	檀紙地区おこし運営委員会	11月 7日	講演
13	府中成大大学	11月 14日	講演
14	観音寺市教育委員会	11月 17日	史跡案内
15	高松大学	11月 18日・12月 16日・1月 20日・2月 17日	講演
16	香川大学教育学部	11月 30日	道跡案内
17	大野原郷土史講座	12月 13日	講演
18	安原文化的歴史保存会	12月 14日	講演
19	三豊市文化財保護協会	12月 21日	講演
20	香川県図書館協会	1月 31日	講演

第 14 表 講演等への講師派遣一覧

(4) 体験講座

7月 23 日～11月 10 日に体験講座を行った。

実施日	タイトル	内 容	人数(人)
7月 23 日・24 日・25 日。 30 日、11月 2 日	ふるさと学習 小中高校生のための考古学講座	実物の考古資料に触ながらの講義および土器作り、匂玉作り	32
11月 10 日	「まいぶんボランティア」による「南海道」をテーマとした地団体との交流事業	南海道に関する討議	15
合 計			47

第 15 表 体験講座実施事業一覧

(5) 発掘体験講座

11月 30 日、12月 7 日に発掘体験講座を行った。

実施日	タイトル	内 容	人数(人)
11月 30 日	道跡に触れてみよう！～池内古田道跡～	発掘体験講座	8
12月 7 日	道跡に触れてみよう！～讃岐国府跡～	発掘体験講座 + 讃岐国府跡歴史散歩	14
合 計			22

第 16 表 発掘体験講座

(6) 考古学講座

専門職員が講師を務める考古学講座を4回開催した。

回	実施日	タイトル	講 師	参加者数(人)
1	7月6日	香川の大名家墓所～高松平家編～	古野 徳久	32
2	9月7日	紫雲出山遺跡の発見	東松 真也	23
3	11月9日	植木北遺跡と古代の多度郡	長井 博志	25
4	1月18日	四国市場第70番札所本山寺の伽藍再興の近現代史 ～五重塔の平成大修理の文化財調査から～	西岡 達哉	35
合 計				115

第17表 考古学講座

(7) まいぶんボランティア活動

まいぶんボランティアは、事業の記録撮影や普及事業の補助などを行った。20名が登録し、21回、延べ85名が活動に参加した。

(8) 新聞記事掲載

四国新聞に「ディープKAGAWA アーケオロジー（考古）編」として、計20回の連載を行った。令和元年度発掘へんろ展に関連して、海に関する展示品について紹介する「海と人々（縄文～弥生時代）」（4回）、専門職員が自身の発掘調査の経験や調査研究について紹介する「考古学と私」（8回）、発掘調査の出土品の中心を占める土器から人々の交流について考える「土器から交易を考える～弥生から江戸」（4回）、埋蔵文化財センターの現在の活動や今後の展望などについて所長が語る「埋文雑感～所長の独り言～」（4回）で構成した。

(9) 資料の貸出・利用

区分	学校・大学	研究会・同好会	教育委員会・博物館・その他公共団体	出版社・新聞社・その他民間企業	個人・他	合計
遺物	1	0	12	0	51	64
写真・パネル	0	0	7	1	2	10
レプリカ・模型	0	0	0	0	0	0
合計	1	0	19	1	53	74

第18表 資料貸出・利用一覧（数字は件数）

(10) 職場体験学習・インターンシップ

団体名	期間	内 容	参加人数(人)
1 斎山高等学校	7月29日～31日	職場体験	3
2 香川県庁インターンシップ	8月20日～26日	職場体験	4
3 高松短期大学	8月27日～9月9日	職場体験	3
4 國際交流協会	9月3日～30日	職場体験	1
5 高松市立青東中学校	9月3日～5日	職場体験	4
6 坂出市立白峰中学校	10月8日～10日	職場体験	2
7 丸亀市立南中学校	10月29日～31日	職場体験	2
8 國際交流協会	12月3日～1月17日	職場体験	1
合 計			20

第19表 職場体験学習・インターンシップ一覧

(11) 刊行物

『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 30 年度』

『いにしえの讃岐』102 号～ 104 号

(12) ホームページ

ホームページ (<http://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/>) の更新を随時行った。

トップページビュー数 22,480

(13) 資料の寄贈

岡 部 一 稔 資 料 一式 4 点（令和 2 年 1 月）

尽誠学園高等学校 資料 一式 528 点（令和 2 年 2 月）

(長井)

3 木器保存処理

当センターには出土した木製品の保存処理を行うための設備（樹脂含浸処理槽）がある。平成 16 年度に施設運営が県直営として以降、発掘・整理業務に伴う保存処理の外部委託と併行して、過去に報告書に掲載した木製品のうちまだ保存処理が終了していないものや、近年出土の木製品のうち芯持の柱材など、短期間での処理が困難な遺物については、直営で保存処理を実施しているところである。

これまでの処理状況は次のとおりである。

処理年度	内容・数量	処理方法	遺跡名等
平成 17 年度	木製品 20 点	PEG	再処理
平成 18 年度	木製品 37 点	PEG	再処理
平成 19 年度	木製品 15 点	PEG	再処理
平成 20 年度	木製品 1 点	糖アルコール	室塚遺跡
平成 21 年度	木製品 5 点	糖アルコール	旧練兵場遺跡
平成 22 ~ 23 年度	木製品 62 点	PEG	大瀧遺跡
平成 24 年度	木製品 129 点	PEG	鹿伏中所遺跡
平成 28 年度	木製品 73 点	PEG	鷗部川田遺跡
平成 30 年度	木製品 27 点	PEG	岸の上遺跡・西村遺跡・空港跡地遺跡・多肥宮尻遺跡
令和元年度	木製品 99 点	PEG	下川津遺跡（森串等小形品）
	木製品 37 点	PEG	下川津遺跡（小形品）
令和 2 年度 (予定)	木製品 128 点	PEG	前田東・中村遺跡（森串等）
	木製品 91 点	PEG	下川津遺跡（中形品）

第 20 表 PEG による保存処理および処理経過一覧

なお処理前に樹種を確認し、各樹種に応じた処理期間等を策定する必要がある。そのため樹種が不明のものについては、あらかじめ各遺物から切片プレパラートを作成し、針葉樹と広葉樹との区分、さらには処理による変形が多いとされるクリ・クヌギ・クスノキについて可能な限り樹種を特定して処理計画を策定している。

PEG による保存処理方法と処理経過は次のとおりである。

- ①処理前の洗浄・写真撮影
- ②クレワット剤（脱鉄・脱色）24 時間処理
- ③8 時間流水洗浄後、複数回水換え
- ④不織布で養生
- ⑤本体もしくはステンレスバットの 20% PEG 溶液に投入
- ⑥1 週間ごとの濃度管理
- ⑦97% 以上に達した段階で取り上げ
- ⑧表面処理
- ⑨乾燥
- ⑩処理後写真撮影
- ⑪収納

含浸処理槽は内部に棚があり、棚上にステンレスバット 4 個を置いた。これを B1 ~ B4 と呼び、本体とバットを分けて濃度を管理した。平成 30 年度から令和元年度にかけて、バットで処理した遺物の PEG 濃度の経過を 2 つのグラフに示した。

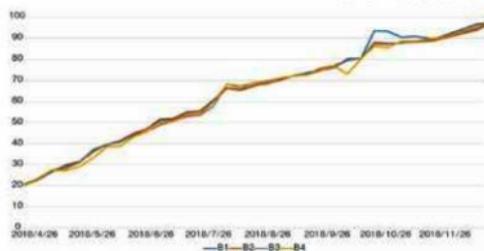


写真 41 下川津遺跡出土 斎串他小形木製品 保存処理完了遺物（1）

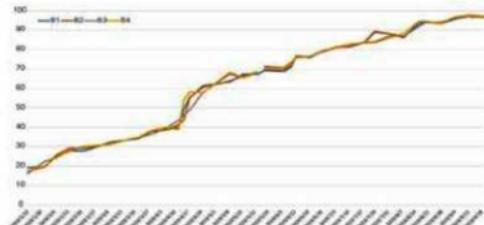
※番号は報告書番号



写真 42 下川津遺跡出土 竊串他小形木製品 保存処理完了遺物（2）
※番号は報告書番号



第16図 平成30～31年・令和元年度
下川津遺跡の竊串等小形木製品保存処理経過



第17図 平成30年度
多肥宮尻遺跡・空港跡地遺跡他の小形木製品保存処理経過

なお、取り上げ後の乾燥段階で変形し始めるものが多数見られた。特にヒノキ等針葉樹の柾目材に顕著である。これらはしばらく再含浸した後にアクリル板に挟んで変形を防止するなどの措置を行った。

完全に乾燥した後、薄葉紙や台紙パネル等で養生・保護して収蔵庫（除湿庫）に保管し、今後の活用に備えている。（森下英）

4 讃岐国府跡探索事業

「香川県文化芸術文化振興計画」に基づき平成 21 年度から開始した讃岐国府跡探索事業は、平成 29 年度で終了し、平成 30 年度から新たに讃岐国府探査事業を 3 年計画で実施している。主な調査事業として讃岐国府跡の遺構内容の確認を目的とした発掘調査を実施した。今年度は、国史跡に指定された開法寺東方地区とは別の主要施設が存在すると想定されている場所で発掘調査を実施した。調査の結果、大型の建物跡などと、これらが設置された施設の東側を区画する 2 条の溝跡が見つかった。

また、讃岐国府跡を活用した情報発信事業として、現地説明会や小中学生対象の発掘体験などを開催した。

(1) ボランティア活動

・登録人数	20 人
・延べ人数	85 人

(2) 地域との交流

内 容	実 施 日	参 加 人 数
第 21 回 水のフェスティバル in 府中湖「道真の里を歩く」	10 月 5 日	100 人
第 21 回 水のフェスティバル in 府中湖 展示「讃岐国府跡を探る 10」	10 月 6 日	6,000 人

第 21 表 地域との交流一覧

(3) 情報発信

内 容	回 数
ホームページへの記事掲載	6 回
情報誌「いにしえの讃岐」への記事掲載	1 回
新聞への連載記事掲載	2 回
新聞への記事掲載	10 回
テレビ出演	9 回

第 22 表 情報発信一覧

(4) 関連行事

行 事 名	会 場	実 施 日	参 加 人 数 (人)
讃岐国府跡を探る 10	高松市讃岐国分寺跡資料館	5 月 21 日～7 月 7 日	458
讃岐国府跡を探る 10	三豊市宗吉かわらの里展示館	7 月 17 日～8 月 25 日	942
讃岐国府跡を探る 10	府中湖カヌー研修センター	10 月 5・6 日	6,000
讃岐国府跡を探る 10	坂出市郷土資料館	11 月 6 日～11 月 28 日	120
讃岐国府跡を探る 10	鏡寺寺中央図書館	12 月 3 日～12 月 15 日	200
讃岐国府跡を探る 10	香川県立図書館	1 月 21 日～3 月 1 日	1,101
讃岐国府跡を探る 10	坂出市役所	2 月 17 日～3 月 6 日	800
讃岐国府跡を探る 10	綾川町立生涯学習センター	2 月 18 日～3 月 5 日	1,438
善通寺市文化財保護協会総会講壇	善通寺市総合会館	5 月 15 日	30 人
丸亀市立中央図書館歴史講座	丸亀市生涯学習センター	5 月 19 日	40 人
坂出市文化協会 45 周年祝賀会記念講演	坂出グラン・ド・テル	5 月 26 日	50 人
讃岐国分寺跡資料館友の会講演会	讃岐国分寺跡資料館	6 月 1 日	28 人
讃岐国分寺跡資料館友の会史跡めぐり	讃岐国府跡周辺	10 月 26 日	15 人
府中社生人学講座	府中老人いこいの家	11 月 14 日	72 人
香川大学地域連携推進プロジェクト支援事業	讃岐国府跡周辺	11 月 30 日	29 人
遺跡にふれてみよう！～讃岐国府跡～	讃岐国府跡周辺	12 月 7 日	14 人
香川県図書館大会研修	香川県立図書館	1 月 31 日	25 人
讃岐国府跡現地説明会	讃岐国府跡発掘調査現場	2 月 9 日	230 人

第 23 表 関連行事一覧

(長井)

(5) 讃岐国府跡第37次調査成果の概要

遺跡名	讃岐国府跡
調査主体	香川県教育委員会
調査担当	香川県埋蔵文化財センター
調査期間	令和元年10月～令和2年3月
調査面積	154m ²
出土遺物	コンテナ数90箱 (土器・瓦・金属器・木器・自然遺物)



第18図 遺跡位置図(1/25,000)

調査の経緯

香川県埋蔵文化財センターは、平成21年度から平成29年度まで「讃岐国府跡探索事業」を実施し、讃岐国府跡の発掘調査を継続してきた。平成30年度以降も、讃岐国府跡調査事業として発掘調査は継続されており、讃岐国府跡の広がりの把握や、これまで主要施設が推定されていた部分における内容確認を目的として発掘調査を行っている。令和元年度に行った37次調査においては、これまでに施設が推定されていた地点において、地形や溝といった遺構からその東辺が判明したほか、区画内で建物などが検出されており、讃岐国府内での施設配置やその内容についての知見を得ることができた。

地点1

37次調査は、地点1、地点2の2つの地点において調査を行った(第19図)。地点1とした範囲は、南で行われた7次調査において、築地堀に伴う可能性のある溝が検出されたほか、北側の6次調査では8世紀代の柱建物が検出されている。かねてから讃岐国府の中の施設の存在が想定されている範囲であり、築地堀や出土遺物の内容からも、国府の有力な候補地の一つである。それらの施設を囲む区画施設の内容について確認するため4本のトレンチを設定している。

37-1・2区については、最大3面の遺構面が確認された。現耕作土より0.6m程下で1面は確認され、1面を構成する層は、中世後半～近世初頭までの造成土である。造成は1面より上面においても継続して行われ、現在の地表面で行われる耕作まで続くものと考えられる。1面ではほとんど遺構は確認されないものの、調査区の東端付近で、現在の地割に沿う形で溝が確認される。溝の埋土には流水の痕跡があり、耕作などに伴う水路と考えられる。現在でも調査地点の東には水路が流れしており、それらの前身にあたる水路と考えられる。

1面を構成する造成土下には、黒褐色の粗砂混じりシルト層が確認された(6層)。6層と同様の層は各調査区で堆積厚に差はあるものの確認され、これまでの周辺の発掘調査においても確認されている包含層(香川県教育委員会2016)に相当するものと考えられる。遺物を多量に含み、古代の遺物も多く含むが、その下限は13世紀後半～14世紀前半に比定される。6層堆積以前と以後の土地利用のあり方が著しく異なることから、この層の形成段階において、周辺も含め土地利用の大きな変革があったことを示しており、6層の堆積後に当地域における耕地化が進められたと推測する。

6層除去後に2面を確認した。遺構は小規模な柱穴や溝が大半である。出土遺物については、11世紀～13世紀までのものがあり、古代末～中世前半の遺構が中心となる。調査範囲内で建物を1棟のみ

復元できたが、全体として柱穴等の密度は低い。2面を構成する層を7層とした。7層は、古代末までの遺物を少量含む。2面の遺構の年代から考えても、10世紀後半～11世紀前半に形成された層である可能性が高く、層中にブロック土を含むことや、面的に広がり、基盤層の標高が低い地点において層厚が厚くなることからも、整地などの目的で施工された可能性が高い。

7層除去後に、3面を検出している。3面では基盤層が確認されるが、基盤層についても、少量のサヌカイト製打製石錐や剥片を含むため、さらに下層に縄文時代の遺構が存在する可能性がある。ただし、保存目的の発掘調査のため、古代の遺構面以下の掘削は行っておらず、詳細は不明である。

3面では、柱穴・溝・土坑等の遺構が確認された。溝はいずれも現在の地割と同方向で、南北方向に延びる。37-1、2区のいずれも確認されているSD1038やSD1041、SD2010とSD2034や、それ以降に形成されたSD2026が近似した位置で確認できる。それぞれの遺構の時期については、いずれも出土遺物が僅かであるため不確定であるが、9世紀以降の埋没が想定される。特に2条並行するように検出されたSD1038とSD1041については、それぞれ近い時期の開削を想定し、同時併存していた可能性も考えられる。溝の間の部分については、7次調査で確認されていたような、基壇状の高まりを有しているとはいいがたく、築地塙状の遺構を本調査地点の状況のみで判断することは難しい。ただし、本調査区における遺構面が、7次調査での遺構検出面と比べて0.3m程低いこともあるため、それらが削平された可能性も残る。7次調査と37次調査において、溝の底面のレベルがおおむね共通することからも、これらの溝が同一の時期の施設を区画していた施設として評価することも可能であろう。

このほか、37-1区では、これらの溝に先行する溝状の土坑(SD1042)も検出されている。一辺4mを超える隅丸方形の土坑であり、埋土は黒褐色の粘質土である。出土遺物からは、8世紀前半の埋没が考えられるが、遺物量はさほど多くない。後述する建物との関連も想定されるが、機能については不明である。

3面は調査区東側に地形の急激な落ち込みが確認される。2面まででも、調査区の東側に向かうにつれて、遺構面の標高は下がる傾向にあるが、3面においてそれは顕著であり、落ち込み内に堆積した埋土から古代の遺物が確認されるため、3面の遺構の時期には、地形の埋没はかなり進んでいたと考えられる。地形の落ちのラインは、37-1・2区間で条里型地割に近い方位で直線的につながることや、落ちの傾斜角度が、西側丘陵から延びる旧地形の傾斜よりも急になることからも、旧地形に人为的な変更が加えられた可能性が高く、落ち込みより西側での施設の設置に伴う可能性を想定しておきたい。

37-3区は、37-1・2区で検出された区画施設の北辺を確認するために、南北方向のトレンチを設定して調査を行った。区画施設の北辺について確認することはできなかったが、37-1・2区で区画されたと考えられる施設の内容の一端が判明したほか、従来低地帯を介在して2つの施設が存在するとされていた範囲について、それらが同一の施設となる可能性が高くなったことが成果として挙げられる。

基本的な堆積状況は前2つの調査区と同様であるが、37-3区では7層に相当する層が僅かにしか確認されない。基盤層が確認されるレベルが37-1・2区より高いため、削平を受けたと考えられる。

1面に相当する遺構は確認されない。2面の遺構については、柱穴、溝、土坑などが検出された。溝は、現在の地割方向よりやや東側に振れる形となっている。柱穴も数基確認されているが、建物を復元することは難しい。

3面では、柱穴や溝が確認された。古代の柱穴については、複数時期の建物を復元することができ、建物は1～3の3棟が復元できる。

建物1は、最も古い建物である。柱穴列が南北方向に7穴、東西方向に3穴確認される。建物内部にも、束柱と考えられる柱穴が検出されている。柱穴の平面形は隅丸方形で、一辺約1.0mを測る。埋土は黒褐色シルトで、粗砂を部分的に含む。柱痕が明瞭に確認できるものでは、直径0.3m程であり、一部柱材が残る。柱穴の深度は、0.4m程で、上面は削平を受けている可能性がある。柱穴の芯々間の距離は、梁行、桁行共に1.8mである。柱穴列の南側及び西側には、溝が巡る（SD3021）。溝の検出幅は0.4mで、深度は0.2～0.3mを測る。柱穴列の屈曲に対応することや、そのほかの遺構との切り合いから考えても、溝は建物1に伴うと考えられる。なお、建物1の時期は、柱穴掘方から出土した遺物と、建物1の柱穴を切る遺構（SD3017）の年代から、8世紀前半～中頃のものであると考えられる。

建物2は、建物1に後出する建物である。柱穴が2穴しか確認されておらず、東西棟か南北棟か定かではないが、現状東西方向に2穴並ぶ柱穴より南側に対応する柱穴は認められず、北側に建物が展開する可能性が高い。掘方の埋土は灰白色のシルトで粗砂を含む。かつての低地帯であったために地下水位が高く、柱材が明瞭に残されていた。柱材は断面円形であり、外面には面取り状に削られた加工痕が残される。

建物3は、建物2とはほぼ同位置に建てられた建物である。柱穴の規模は、検出のみでとどめているため平面規模は明らかではないが、建物2の柱穴とはほぼ同様のものであると考えられる。

建物2、3については、その年代を示す遺物は出土していないものの、建物1との関係から、8世紀後半～9世紀の年代を推定しておきたい。

また、建物に先行する遺構も確認されている。部分的な調査しか行っていないものの、柱穴や溝の方向が南北方向を指向するため、これまでの調査成果を参考にすると、7世紀末の年代が想定される。今回調査においては、この時期に相当する遺構の密度はさほど高くない。

小結

地点1の調査では、微高地上に位置するエリアの東辺を区画する施設が確認され、その内部の状況が判明した。7次調査で検出された築地塀との区画施設の連続性や、性格の一一致については、溝の底面のレベルが近似することや、溝の芯々間の距離が類似することからも、関連する可能性が高いが、これらの展開する範囲や北側の状況の解明は今後の課題として残る。これらの溝に開まれた微高地は、周辺の発掘調査の所見からも、一辺100m程は地形面が連続する可能性が高く、この内部に施設が存在することがさらに確かなものとなった。建物の規模・性格の把握についても課題が残るが、今回調査で検出された建物と、6次調査で確認された建物については、柱間の距離や年代の面からも関連性も考えられる状況であり、これまでの調査成果の再検討にもとづき、今後の調査・研究を進めていく必要がある。

地点2

地点2は、現在の周知の埋蔵文化財包蔵地「讃岐国府跡」の北辺部にあたる。地点2の周囲では、8次調査において面的な調査が行われており、調査の結果、顯著な古代の遺構は確認されていないものの、墨書き土器や施釉陶器といった特徴的な遺物が包含層から多く見つかっている。近隣にそれらの器物を用いた施設が存在する可能性が高いと考えられ、それらの施設の所在や内容を確認するために調査を行った。

発掘調査地点は、8次調査地より北側の丘陵から派生する微高地の縁辺にあたる。地点内では、調査

箇所以外でも、須恵器・土師器片が全域で採集される。調査区は、現在の地割と同一方向で、南北方向に設定している。

調査区の堆積状況としては、表土下に耕作のための造成がなされている。造成土の下からは、包含層が確認される。遺物をあまり含まないが、中世前半までの遺物を少し含む。

それより下層において遺構面が確認できる。遺構面は、基盤層である黄色シルト層上で確認され、調査区の南側へ向かいやや傾斜する。調査区南側には、それらの傾斜に堆積した層が認められる。堆積層中には古代の遺物がまばらに含まれており、從来近辺に推定されていた低地帯の縁辺をして考えられる。以上から、低地帯が古代の段階において、次第に平準化していった状況が考えられる。現道に沿うような形で低地帯が存在しており、それに対応するように、地形の落ちより南では遺構はほとんど確認されない。

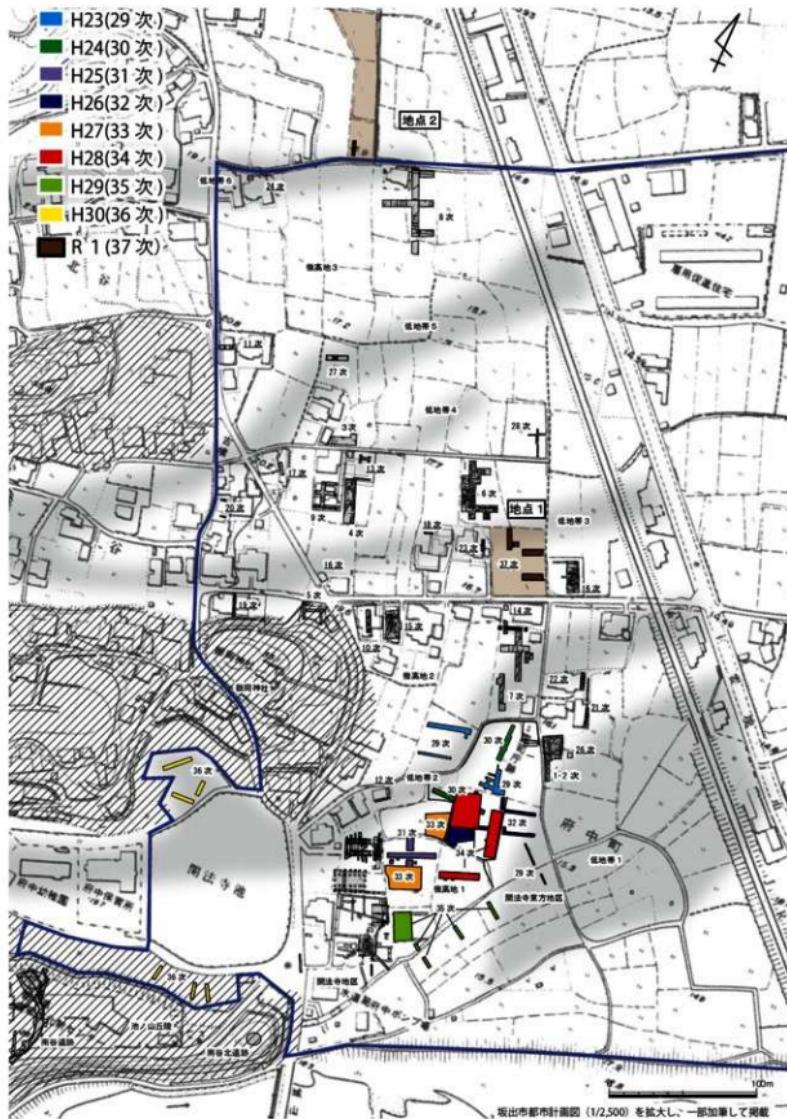
遺構は、柱穴、溝が確認された。柱穴は、平面隅丸方形のものと、円形の小規模なもののが存在する。隅丸方形のものは3穴確認され、全体は確認できないものの、柱穴列を構成している。建物を構成する柱穴である可能性が高い。

また、溝も数条確認されている。溝は、柱穴に切られる形で、条里型地割の方向のみでなく、南北方向の溝も確認される。溝は埋土に多量のシルトブロックを含む。遺構の年代については、出土遺物で明確に時期を特定できるものが少ないが、これらの遺構面を被覆する包含層の形成年代や遺構の方位から、8～9世紀のものと考えられる。

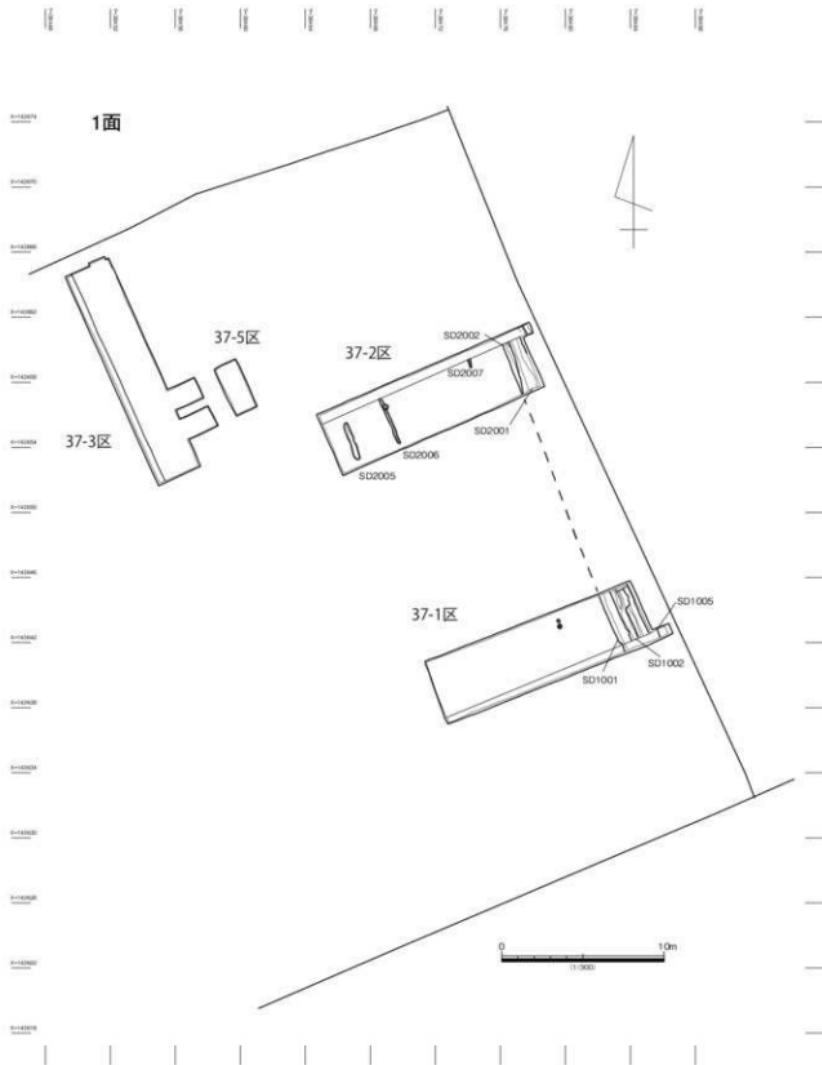
出土遺物については、須恵器・土師器が大半であるが、その中に7世紀代に位置づけられる須恵器等も散見されることからも、これまでの讃岐国府跡での遺構の変遷年代と整合する。

小結

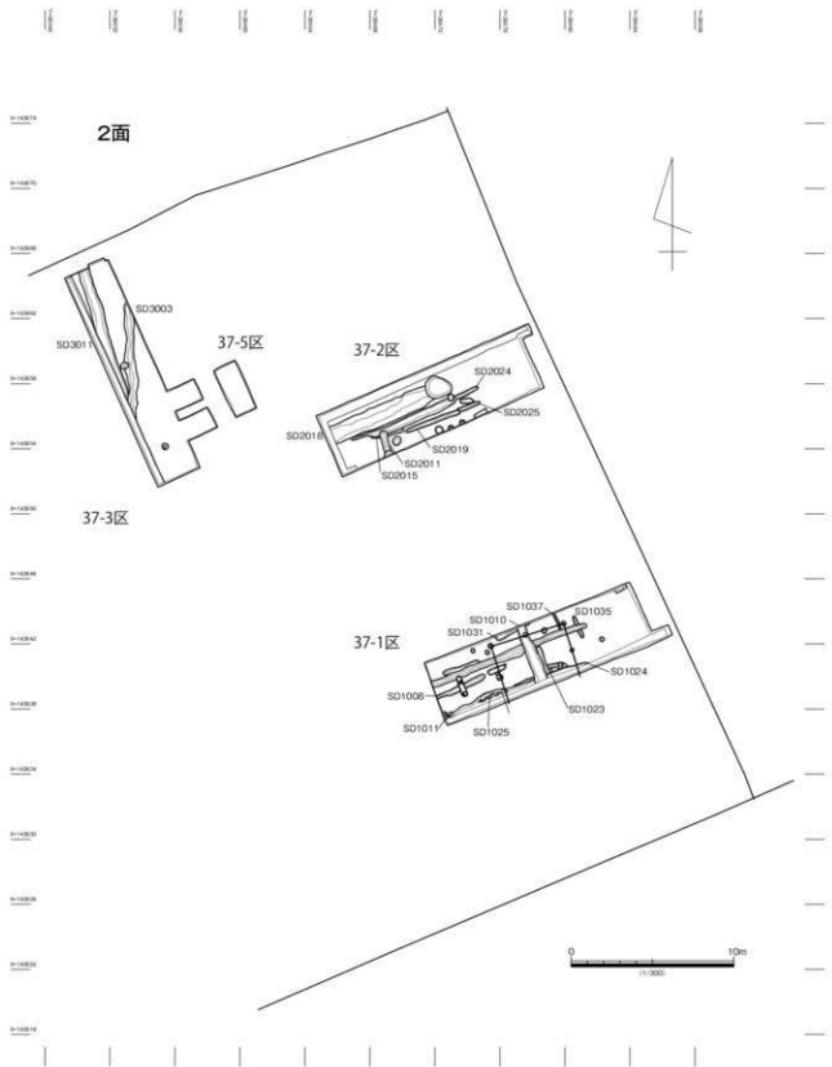
地点2については、調査当初の目的であった8次調査で推定されていた施設といえる遺構は、検出されなかった。ただし、それらの低地帯より上がった微高地上に、さらに古代の施設が展開することが明らかとなり、周辺地形の状況も含めてより具体的に讃岐国府に関連する施設の絞り込みが可能となった。今回の調査でも從来の地形復元に若干の変更を行った。地形状況の再検証も含めた検討により、今後もさらに施設などの絞り込みを行い、解明に努めていく必要がある。(竹内)



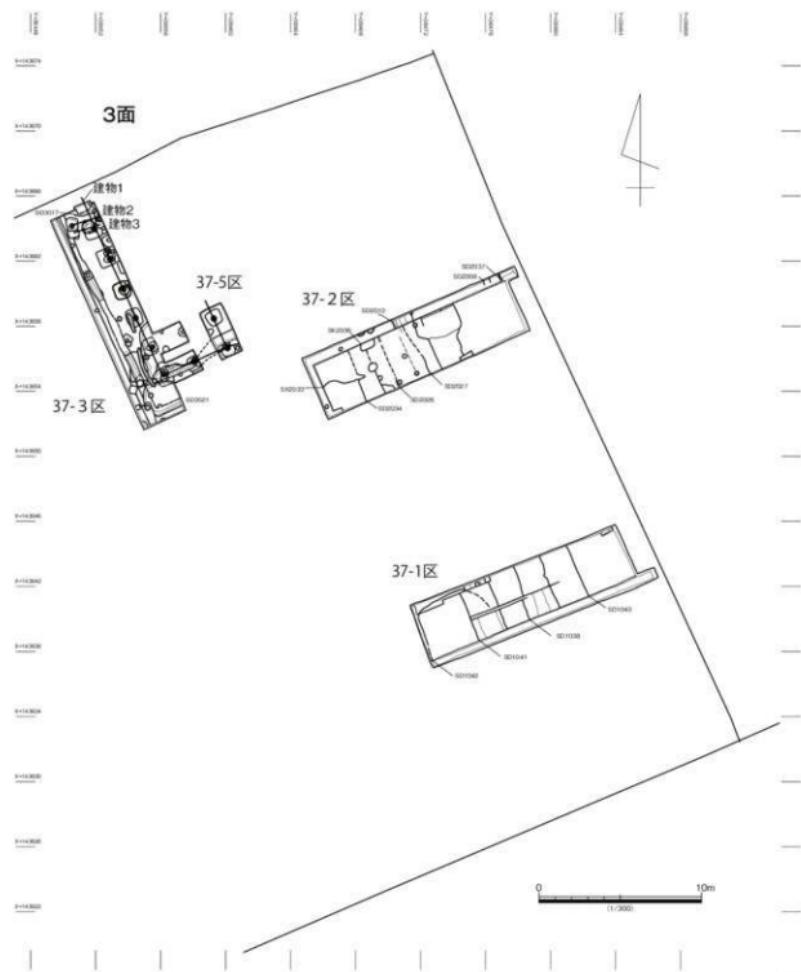
第19図 譜岐国府跡調査地



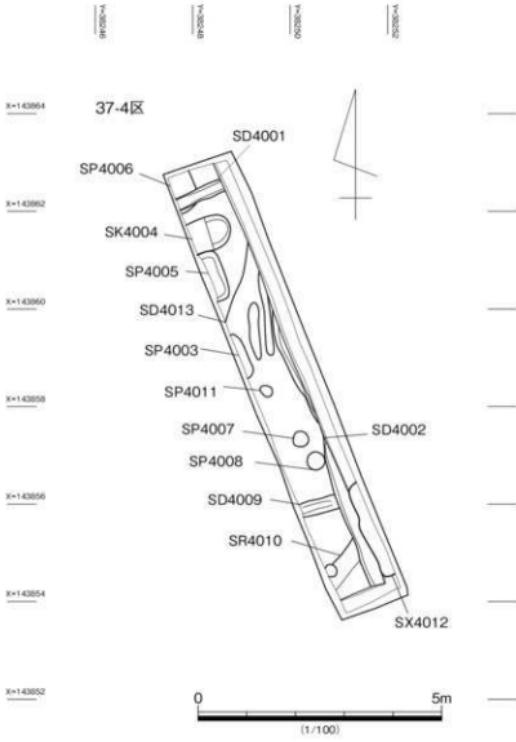
第20図 37-1～3、5区(地点1) 1面平面図



第21図 37-1～3、5区(地点1) 2面平面図



第22図 37-1～3、5区(地点1) 3面平面図



第23図 37-4区(地点2) 平面図



写真 43 37-1 区 SD1042・1038 断面 (南西から)



写真 44 37-3 区 建物 1 検出状況 (南東から)



写真 45 37-3 区 建物 1 柱穴断面 (南西から)



写真 46 37-4 区 全景写真 (北西から)

5 香川県内遺跡発掘事業

香川県教育委員会では、埋蔵文化財を適切に保護するため、国庫補助事業として遺跡詳細分布調査や遺跡発掘調査を継続して行ってきた。

本事業では、国や県等が主体となる種々の開発事業に対する事前の調整を図ることを主眼として、遺跡の分布・試掘調査や遺跡保存のための範囲確認調査等を行っており、実施機関は香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課である。

平成 26 年度からは、当センターが開発事業者に応じて事業の一部を分担してきたが、平成 29 年度からすべての開発事業者と事前協議、分布・試掘調査を行い、開発事業実施前に埋蔵文化財の保護に関わる必要な資料の作成を行ってきた。またそのほか、遺跡保存のための範囲確認調査も分担している。

今年度は、開発に係わる分布・試掘調査、及び遺跡保存のための範囲確認調査を行った。前者については、別に刊行した『埋蔵文化財試掘調査報告 32 - 令和元年度香川県内遺跡発掘調査 -』に報告した。以下では、県指定史跡今岡古墳について、追加指定のための資料を得ることを目的として実施した、範囲確認調査の成果を報告する

今岡古墳

今岡古墳は、高松平野西端に屹立する勝賀山(標高 364 m)より南東に派生する尾根端頂部(標高 62 m)に築造された、古墳時代前期後葉の前方後円墳である(第 24 図)。古墳前面には本津川が北流し、本津川を介して石清尾山と対峙する。古墳は、勝賀山東麓の丘陵群の中で、最も東に長く張り出した丘陵上に築造されている。古墳からは、前面に所在する石清尾山により東への眺望を遮られるが、北は本津川河口から瀬戸内海が、南は香東川下～中流域の高松平野西縁部及び遠く讃岐山脈を眺望することが可能で、こうした可視範囲を意識して、本墳の築造位置が選定されたと考えられる。また、本墳の南約 4 km に所在する中間西井坪遺跡では、円筒埴輪や土師質の土製棺を焼成した、埴輪焼成遺構が検出され、そこで焼成された埴輪類や土製棺が、本墳へ運ばれた可能性が指摘されている。本墳の被葬者の政治・経済的基盤の具体像を明らかにする上で、重要な資料と考えられる。

本墳は、古くより円筒埴輪や家形埴輪等が供獻された前方後円墳として知られ、前方部上で土師



第 24 図 遺跡位置図 (1/25,000)



写真 47 5 トレンチ全景 (西から)

質焼成の土製棺が出土する等したことから、1957（昭和32）年に県の史跡に指定され、保存されてきた。また、1964（昭和39）年には、その土師質の土製棺の調査が実施され、内部より船載鏡を含む豊富な副葬品が出土した。しかしながら、これまで測量調査や一部の出土遺物の資料化がなされたのみで、墳長約60mもしくは70mの古墳時代中期前葉の前方後円墳ということ以上に、詳細な古墳の規模や構造等については、不明な点が多くあった。古墳時代前期から続く、高松平野の前方後円墳の系譜の中で、長崎鼻古墳と共に最も新しい時期に築造された古墳の一つとして重要な位置を占め、その適切な保護や活用を図るためにも、資料の整備が喫緊の課題であった。こうしたことから、平成29年度より、古墳の正確な範囲を確認し、適切な保護を図ることを目的として発掘調査を実施してきており、本年度は後円部に、トレンチ1か所（5トレンチ）を設定し、調査を実施した（第25図）。調査面積は7.2m²である。なお、調査は高松市教育委員会と合同で実施しており、市教育委員会は今年度、前方部でトレンチ1か所（6トレンチ）の調査を担当した。

5トレンチの調査

5トレンチは、平成29年度に実施した1トレンチの南約65mに位置する。幅0.2～1.0m、平面長9.1mの東西に長いトレンチである。1トレンチでは、上下2段の平坦面が検出され、墳丘の段築に関係する遺構と考えられた。5トレンチでは、1トレンチで確認された平坦面の性格を、より詳細に明らかにすることを目的として位置を設定した。

5トレンチでは、現代の搅乱土（第26図1層）や表土（同図2層）、近年の果樹園造成時と考えられる造成土（同図3層）、旧表土（同図4層）を取り除くと、トレンチ中央部で2箇所の長径12m前後の土坑状の落ち込み（同図5層）を検出した。いずれも埴輪片や葺石と考えられる円礫を含



写真48 5トレンチ近景
(西から、奥に石清尾山を遠望)



写真49 5トレンチ近景 (南西から)



写真50 平坦面2上面遺物出土状況 (西から)



写真51 平坦面2土層 (北東から)

む斜面堆積土（同図6層）上面より掘り込まれていることから、近年の植樹痕もしくは風倒木痕と考えられる。

上述した斜面堆積土の下面では、トレンチ中央部で花崗岩の岩盤が露出し、その上下で平坦面を検出した。上位の平坦面（平坦面1）は、標高57.95～58.25m以上で検出した、幅18m以上のテラス面で、上位に埴輪片を含む土（同図7層）が堆積していた。1トレンチの平坦面1とやや検出した標高値は異なるものの、一連の平坦面の可能性が高いと判断され、段築テラス面の可能性が考えられる。7層中からは、埴輪片や葺石以外に遺物は出土しておらず、古墳築造後の比較的早い時期に、上位の墳丘の一部が崩落・堆積したものと考えられ、テラス面は古墳築造時のものである可能性が高いが、疊敷等の遺構は認められなかった。

下位の平坦面（平坦面2）は、標高56.45m前後で検出した、幅14m以上の平坦面で、より東側は現代の攪乱溝や果樹園造成時の削奪を被っており、正確な幅については明らかにできていない。平坦面上には、暗灰黄色土の流土層（同図8層）が堆積するが、本層からは埴輪片や葺石は一切出土していない。人為的な盛土層である可能性は低く、墳丘1段斜面部の崩落土である可能性が考えられ、1段斜面部は地山を削り出したまで葺石等は施されず、またそのテラス面上には埴輪が樹立されていなかったことを示唆するものと考える。

5トレンチからは、多量の円筒埴輪や朝顔形埴輪以外には、形象埴輪として家形埴輪とみられる小片が少量出土したのみで、埴輪類以外には遺物は出土していない。

まとめ

5トレンチの調査について、1トレンチの調査結果と合わせて考えると、平坦面2は墳裾基底部のテラス面、平坦面1は第1段テラス面と考えられ、1段目の墳丘高は1.5～1.8mに復元できる。また1段目は、専ら基盤層を削り出して造成され、盛土等は認められず、5トレンチでは基底部テラス面上に堆積した流入土中に葺石や埴輪が認められなかったことから、1・2段目の斜面部に葺石は施されず、1段目テラス面への埴輪による加飾は省略された可能性が考えられた。こうした想定の妥当性については、なお追加の調査を必要とするが、これまでの後円部の調査から推測される1案として提示したい。さらに、後円部の2か所のトレンチからの推定ではあるが、後円部基底線はほぼ正円を描くことが想定され、前方部前面の基底部の標高は57.4m前後であること（香川県埋蔵文化財センター2019）から、後円部と前方部の比高差は約1mと、墳丘基底部が水平に近く設定されていることは、本地域の前期以来の丘陵上に立地する前方後円墳の築造方法等の変遷観より、新しい様相と理解できる（藏本1995）。なお、後円部の第1段テラス面から墳頂部までは4m前後を測り、後円部は3段築成であった可能性があるが、この点は今後の課題としたい。

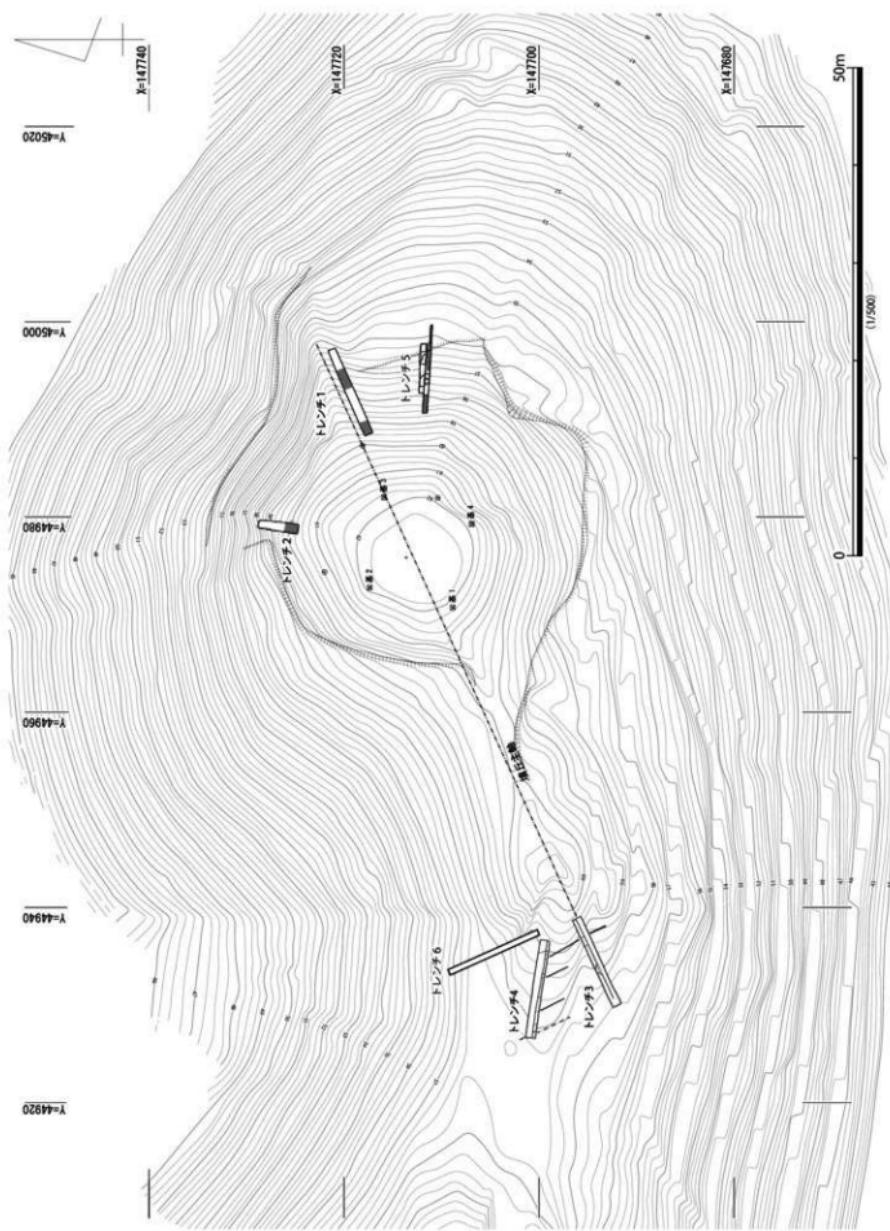
最後に、今年度までの調査を踏まえると、本墳は全長65.9m、後円部径約35m、同高約6m、前方部高約3.4m、墳丘主軸TN65.6°Eの前方後円墳と考えられる。

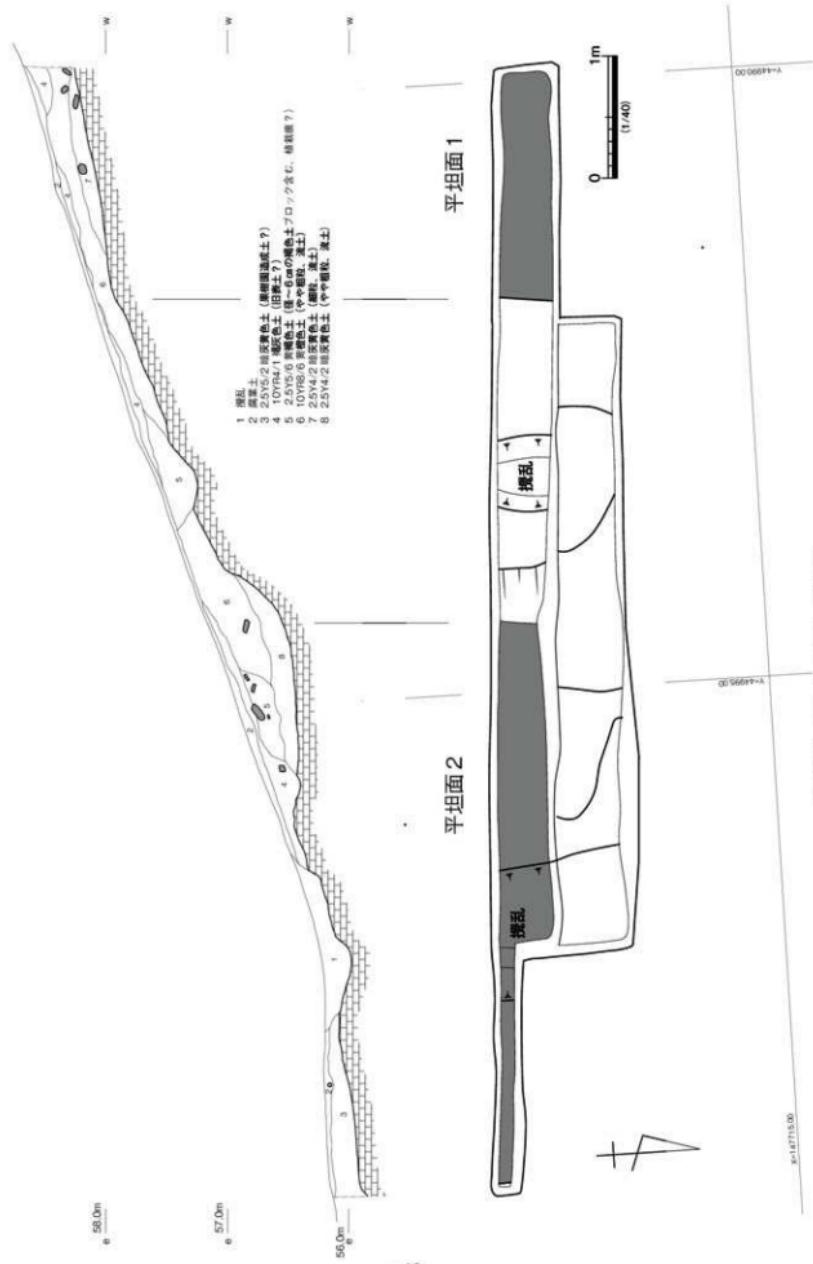
引用・参考文献

香川県埋蔵文化財センター2019「今岡古墳」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成30年度』

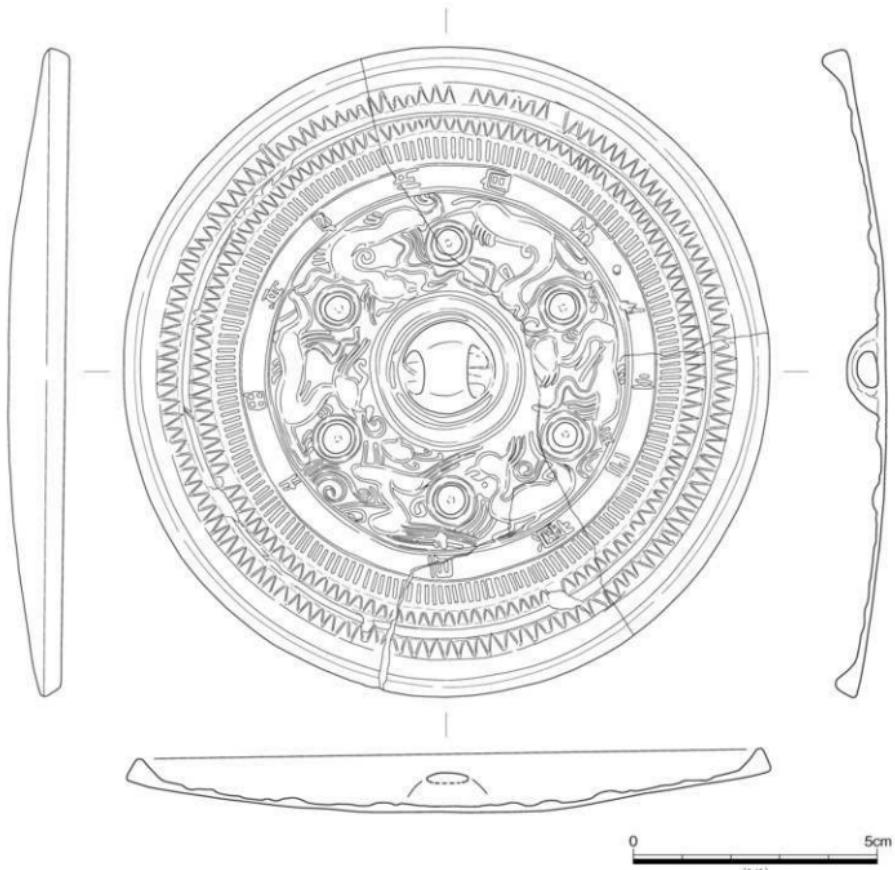
藏本晋司1995「香川県高松市三谷石舟古墳の再検討」『香川考古』第4号、香川考古刊行会

第25図 トレンチ配置図





第26図 5トレンチ平・断面図



第27図 前方部土製棺出土銅鏡実測図（香川県埋蔵文化財センター保管）

付論

第27図は、1964年の前方部の土師質土製棺の調査時に、棺内より出土した銅鏡である。面径13.2cm、重量207.80g、縁高0.5cmの斜線上方作鉛紋帶鏡で、図右半部を中心にして4片に割れており、現在接着剤により補修されている。破損の時期は不明だが、完鏡で副葬されたと考えられる。鏡背面の画像は精緻で、鑄上がりも良好だが、画像は浅く、やや曖昧模糊とした印象を受ける。漢鏡7期、2世紀後半の製作から間もない時期に列島に流入したとされる鏡群（岡村秀典1992「浮彫式獸帶鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳の出現を探る』、出雲考古学研究会）で、本墳への副葬までに長期の保有が想定され、入手から副葬までの経緯について、機会があれば検討を試みたい。（蔵本）

III 調査研究

1. 白鳥廃寺跡の伽藍配置と変遷 －1～3次調査の再検討－

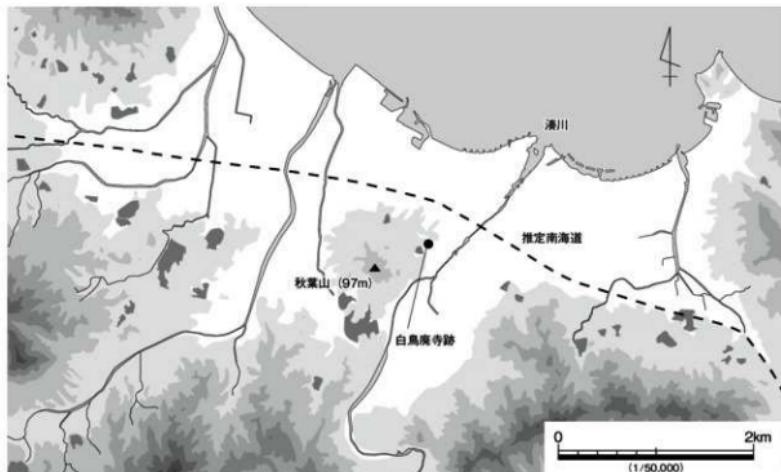
はじめに

乗松真也

白鳥廃寺跡は、香川県東かがわ市漆に所在する古代寺院である。白鳥廃寺跡は、北、西、南の3方を標高約97mの秋葉山から派生する標高15～20mの丘陵に囲まれ、西方を漆川で画された狭小な平地に所在する。この平地の北寄り、北西から伸びる2本の尾根に挟まれた谷の出口付近に伽藍域が広がる。これまで数次の発掘調査が実施されたが、1次調査を除いて簡略な概要の公表にとどまっている。2012～13年には白鳥廃寺跡の背後に隣接する山下岡前遺跡が香川県埋蔵文化財センターによって発掘調査され、山下岡前遺跡の一部が白鳥廃寺跡の寺域に含まれることが明らかとなった。現在、香川県埋蔵文化財センターでは山下岡前遺跡の発掘調査報告書を作成中であるが、同遺跡の評価には白鳥廃寺跡の調査成果が不可欠である。よって、本稿では香川県埋蔵文化財センターで保管している2・3次調査の記録や遺物を整理し、提示しておきたい。なお、2・3次調査の図面や遺物取り上げ記録には不備が目立ち、残されている写真も多くない。本稿は、こうした資料から可能な限り当時の調査記録を復元したもので



第28図 白鳥廃寺跡位置図1



第29図 白鳥廃寺跡位置図2

ある点を断っておく。あわせて、1次調査の内容についても検討を加える。

1 1次調査の概要

1968年の年初、水田中に存在する高まりが土地耕作者によって削平された。その際、東側の高まり（塔基壇）から塔心礎と礎石9石、西側の高まり（西方基壇）から礎石数石が出土した。これ以前にも、水田中に残る高まりと周辺に散布する瓦が散布から、当該地点は古代寺院跡であると推定されていたが、塔心礎などの発見により古代寺院の所在が確実となった。土地所有者は心礎を地元の白鳥小学校に寄付する意向を持っていたが、白鳥町（現東かがわ市）が基壇2基を含む水田約40aを50万円で購入した。白鳥町教育委員会は白鳥廃寺跡の香川県指定史跡指定の申請を行い、この申請を受けて香川県教育委員会と白鳥町教育委員会は寺域の範囲と遺構の存在を確認するために1968年12月22日から1969年1月6日まで発掘調査を実施した。

塔基壇周辺のボーリング調査では、心礎から約6mの地点で石列と推定されるものを確認し、1辺約12mの方形基壇を復元した。西方基壇では、削平をまぬがれた箇所（西部）の上面の表土を除去し、礎石（11石）を検出した。検出した礎石の一部は柱座を有する。削平によってあらわになった西方基壇断面の精査により版築による基壇形成が明らかとなった。基壇の3辺（北辺、西辺、南辺）で石積の残存を確認し、さらに一部の発掘調査により石積の外側で敷石とみられる遺構を検出した。塔基壇、西方基壇の南北でも発掘調査やボーリング調査を実施し、北方建物、南方建物、回廊の位置を推定した。

1次調査の結果、白鳥廃寺跡の伽藍配置は以下のように復原された。

「まず伽藍の中央正面に南大門が、つづいて中門が配置され、中門の左右には回廊がとりついていた。この南大門、中門と考えられる遺構の中心線を延長すると北方建物跡の中心となり、この線が伽藍の中軸線と考えて誤ないであろう。東西二つの土壇はこの中軸線からいづれも二〇メートル（天平尺に

換算すると六六、六尺）のところに当たる。

ところで東方土壇は塔心礎石の遺存によって塔跡であることが明らかである。西方土壇は、規模としては東方土壇よりやや大きい程度であるが、塔心礎石がなく、塔跡と考えるよりも小金堂的性格をもつた建物と考える方が良さそうである。北方建物跡を金堂跡とするか講堂跡とするかは疑問がのこされているが、その北方は丘陵となって背後にさらに一棟の建物を配置する余裕がない。従って若し西方建物を小さいながらも金堂と見た場合には講堂跡である可能性が大きい。回廊跡はまだ充分調査していないが中門から東西に延びてそれぞれ北にまがり、さらに左右に折れて北方建物跡にとり付いていたものと考えられる。」（藤井ほか 1970,pp.18-19）

2 2・3次調査の成果

(1) 調査の経緯と経過

白鳥廃寺跡の寺域内で、農道設置と塔基壇周辺整備が行われることになり、それに先立って香川県教育委員会が確認調査を実施した（2次調査）。2次調査では塔基壇の南辺と東辺を確認し、さらに北辺と西辺の確定を目的として3次調査を行った。

(2) 各調査区の層位と遺構

第8トレンチ

塔基壇中央に残る心礎の南側で南北方向に設定した調査区である。現場での記録によれば花崗土、鶴床の下位は塔基壇の盛土と解釈されている。9～15層は水平方向に細かな堆積が認められるため、版築状の盛土であることが確実である。3～8・16～18層は、9層以下を掘り込んだ後に埋め戻した堆積にも見えるため、心礎の掘りかたとその埋土だろう。12層以下の塔基壇盛土に少量の瓦片が含まれるという注記を重視すれば、2・3次調査で確認された塔基壇は創建後に改築されたものの可能性も残る。

Aトレンチ

3次調査による塔基壇北辺中央部の調査区である。前年度の2次調査で塔基壇南辺・東辺が確定し、心礎を中心に北辺の位置を推定して設定したとみられる。調査区北部では川原石の集石が東西に並んで検出された。

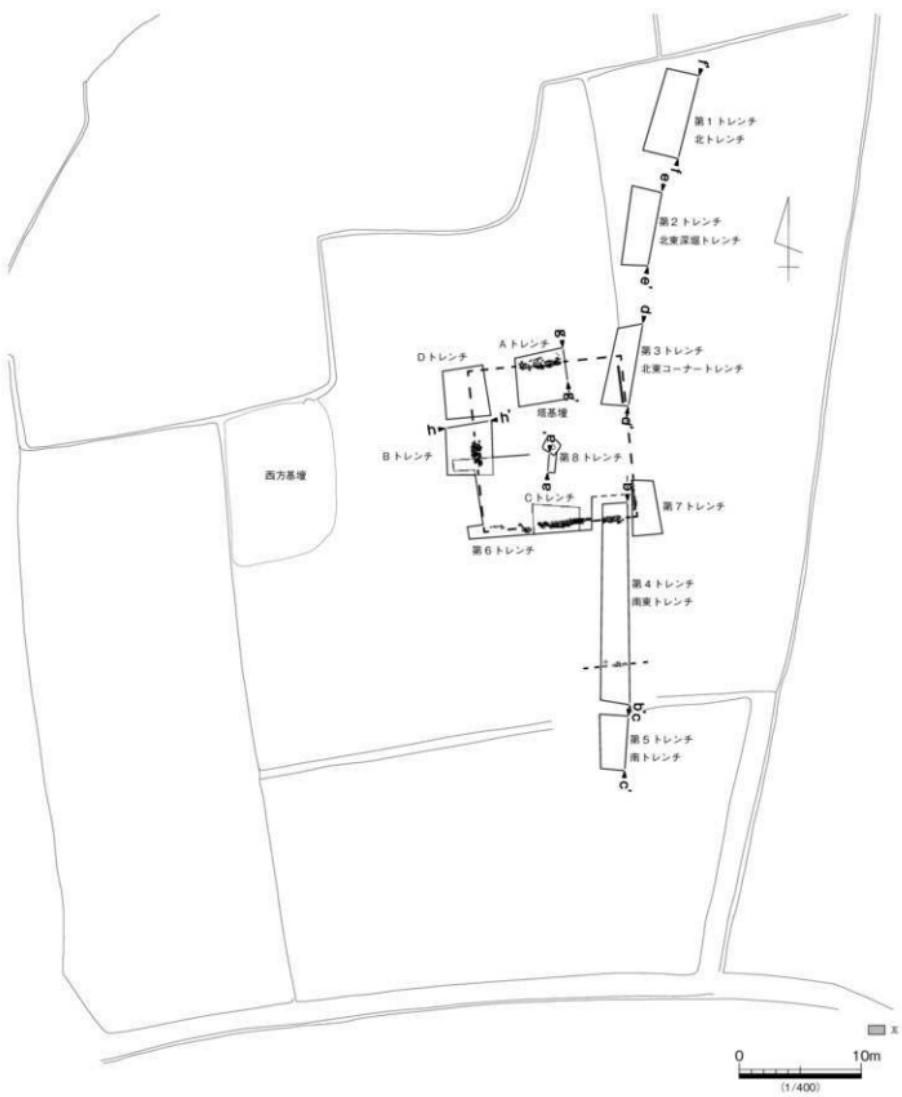
東壁断面では基盤層（V層）の上に盛土とみられる層（IV層）が堆積し、その上位に版築土と判断された複数の水平堆積層（III層）がある。III層は東壁の南側にしか確認されず、平面で検出した川原石の集石はIII層の北側に位置する。集石は基壇裾、または基壇側面に設けられた乱石積の残骸と考えられる。

Dトレンチ

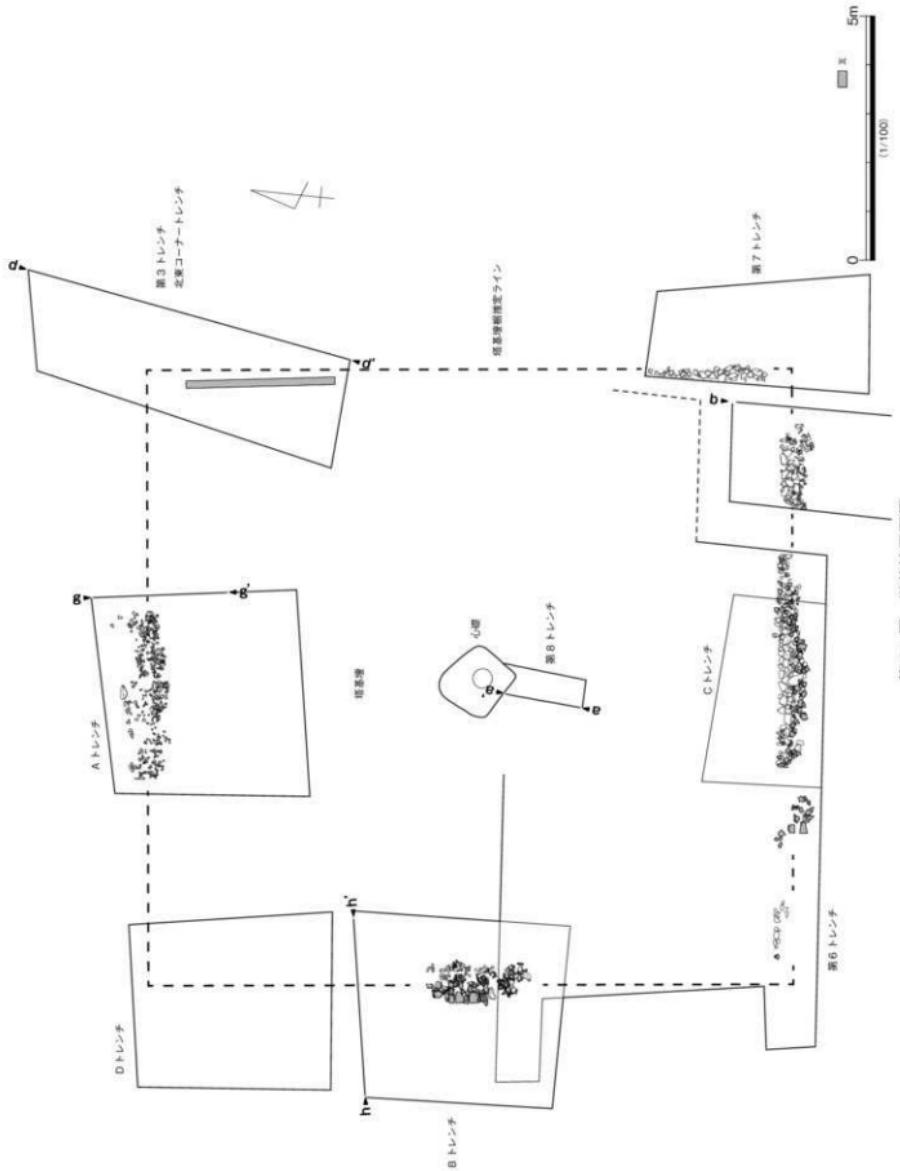
3次調査で塔基壇北西隅にあたる調査区である。「隅丸の状態で基壇を検出できた」（大山・松野 1984,p.10）とされるが、図面や写真がないため詳細は不明である。

Bトレンチ

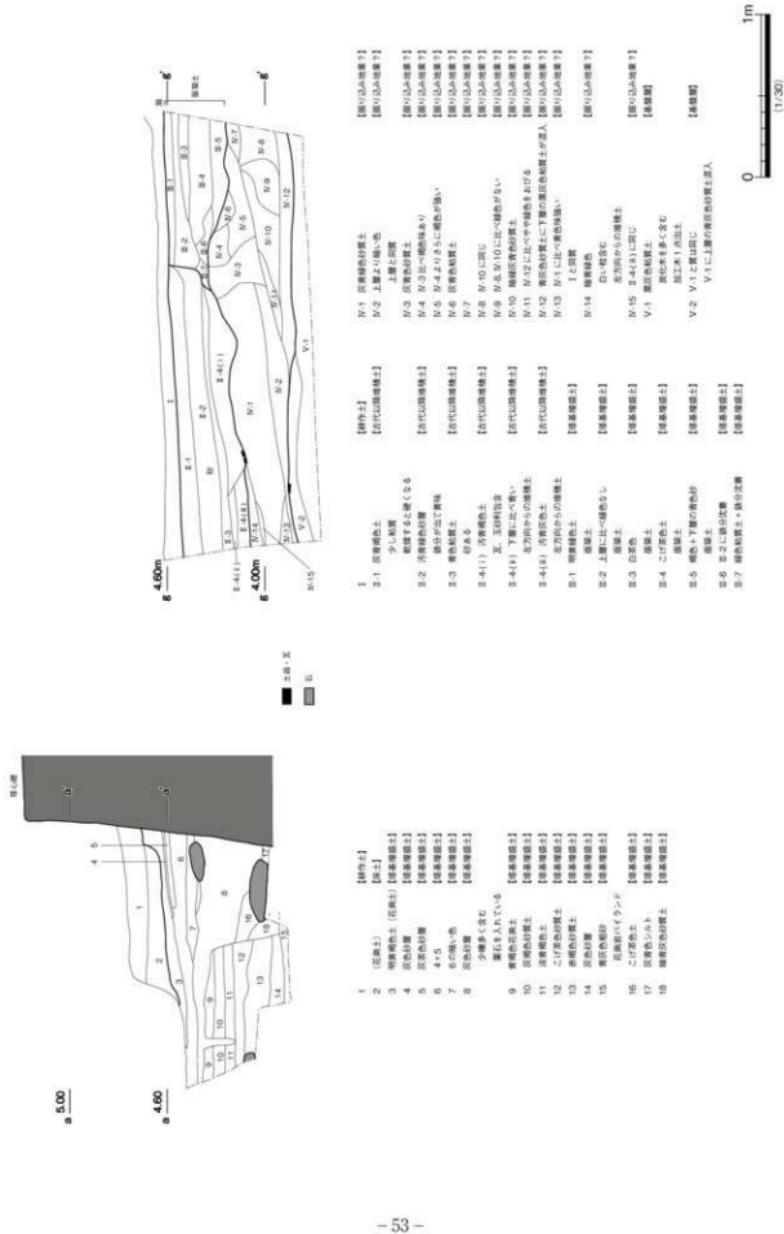
3次調査による塔基壇西辺中央部の調査区である。前年度の2次調査で確認した塔基壇南辺・東辺と心礎から西辺を推測して設定したとみられる。2次調査の第6トレンチで石や瓦の一部を検出していた



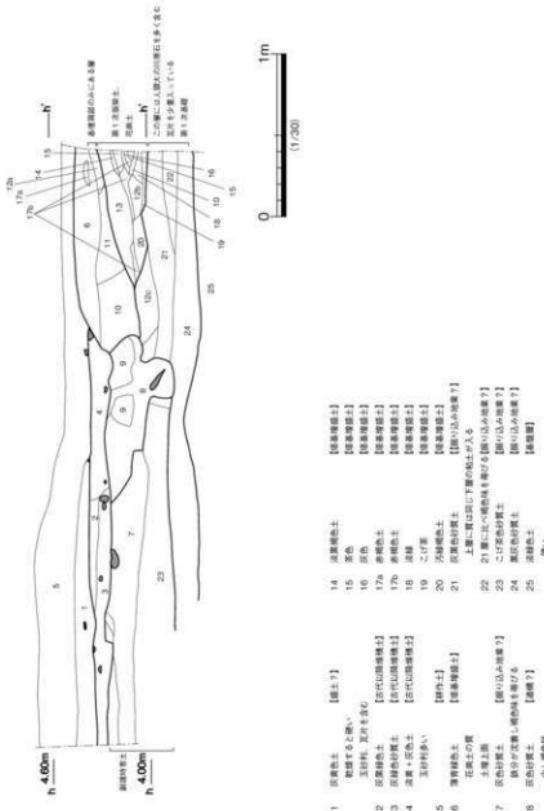
第30図 2・3次調査 調査区位置図



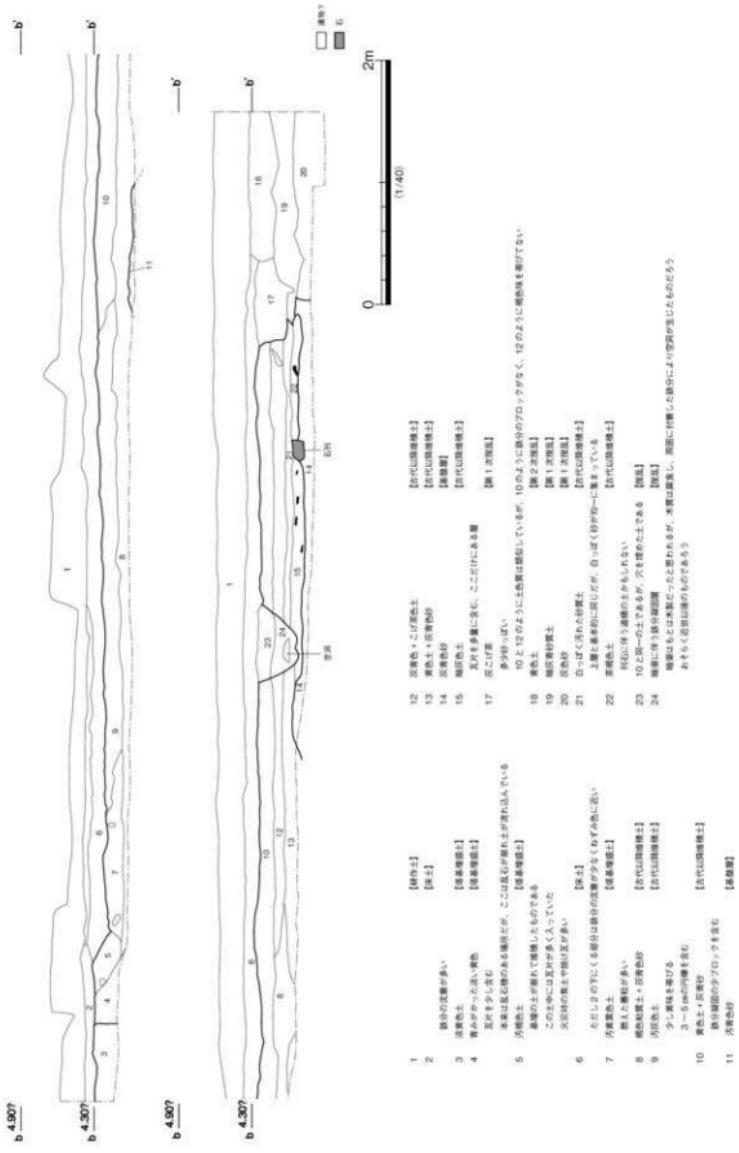
第31圖 塔基壘平面圖



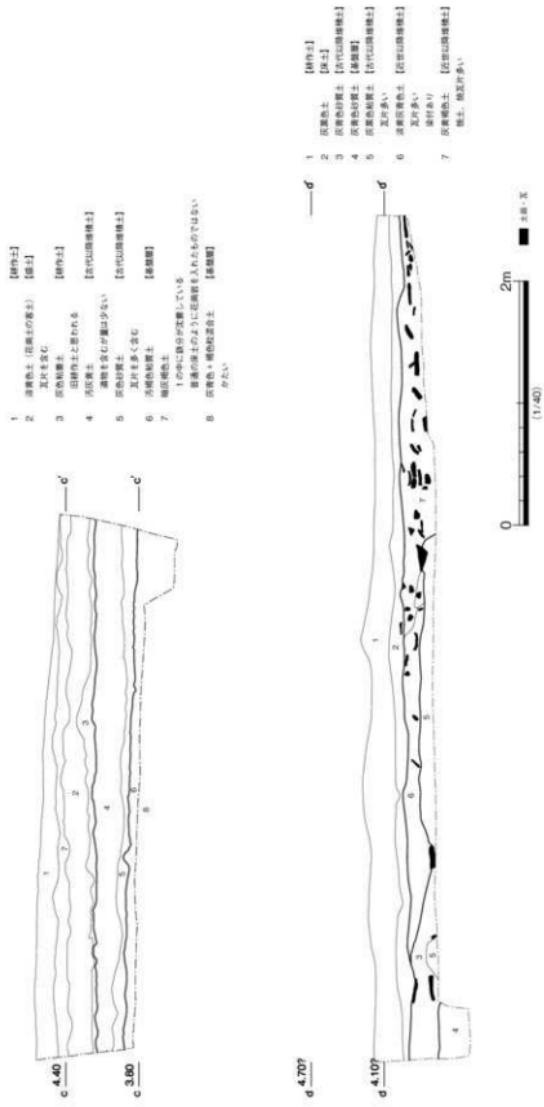
第32図 第8トレーンチ・A断面図



第33図 B トレンチ断面図



第34図 第4トレンチ（南東トレンチ）断面図



第35図 第5トレンチ(南トレンチ)・第4トレンチ(北東コーナートレンチ)断面図

のであれば、これらを根拠に西辺を推測したことになるが、第6トレンチ西部の記録や写真がないため詳細は不明である。調査区中央やや南東寄りで、南北に並ぶ川原石の集石と瓦群が検出された。図面で判断する限り、多くの瓦は集石上かつ集石の西側にあるようだ。

北壁断面の図面によれば、基盤層（25層）上の12c・21・22・24層は多量の人頭大の川原石と少量の瓦片を含む「第1次基礎」とされる。その上位の12b・13～16・17b・18～20層は「第1次版築土」とされ、細かな堆積の単位が記録されている。当該層は版築による盛土としていいだろう。6・10・11・12a・17a層も基壇構成土とみられるが、版築状の堆積ではないため、流れた土の可能性もある。「創建時客土」とされる7・23層は、塔基壇盛土との先後関係が不明だが、おそらく版築状の盛土以前に盛られた土で、掘り込み地業に伴う層の可能性がある。2～4層は古代以降の堆積層のため、基壇の高まりは東側にある。集石は、この高まりの西側に位置するため乱石積の痕跡だろう。また、瓦群は本来塔に葺かれていたものと考えられる。

第6トレンチ・Cトレンチ

第6トレンチは心礎の南側、塔基壇の南辺に設定された2次調査による調査区である。明確な範囲を示す図がなく、また調査区名も記録されていなかったため、本稿執筆時に調査区範囲の推定を行った。南東トレンチで検出された塔基壇南辺の延長箇所として設定された調査区だろう。調査区南部で集石と瓦群が一列に並ぶように検出された。瓦群は集石上、または集石の南に位置する傾向がある。

3次調査Cトレンチは、第6トレンチで検出した集石の再確認を目的とした調査区である。

第4トレンチ（南東トレンチ）

2次調査による南北に長い調査区で、農道予定地に設定された。調査区北端部付近では小砾群の上に直径20cm程度の川原石（砂岩）が東西に並べられていた。2段以上残存している箇所はない。これらは塔基壇の南辺にあたる乱石積の残骸だろう。東壁断面でも塔基壇盛土が確認されている（3層）。4・5層は塔基壇の崩落土とみられるが、4・5層間に7・8層を含むことから崩落土の堆積に時間差を認める。注記には5層が瓦を多量に包含し、焼土や二次焼成の瓦も含むある。

調査区南端部付近では直径25cm程度の河原石（砂岩）が東西に並んで、南側に面をもつように検出された。東壁断面によれば、この列石は基盤層直上に設置されている。また列石の北側には幅約1mで瓦が集中していた。

第7トレンチ

南東トレンチの北東に位置する2次調査の調査区である。南東トレンチの塔基壇南辺と北東コーナートレンチの瓦列を結ぶ位置での塔基壇南東角の検出を目的とした調査区だろう。調査区北西部で南北に並ぶ集石と瓦群が検出された。集石と瓦群は塔基壇東辺を示す遺構と判断できる。

第3トレンチ（北東コーナートレンチ）

2次調査の調査区で、農道予定地に設定された。調査区南部で南北方向に並ぶ瓦群が検出された。写真では川原石も散見される。Aトレンチ、27トレンチの成果と合わせれば、瓦群は塔基壇東辺を示す蓋然性が高い。

第5トレンチ（南トレンチ）

農道予定地に設定された2次調査の調査区で、南東トレンチの南に位置する。基盤層直上に遺物を含む層が堆積するが、時期は特定できない。

第2トレンチ（北東深堀トレンチ）

農道予定地に設定された2次調査の調査区で、北東コーナートレンチの北に位置する。基盤層直上から近年の旧耕作土までの間に古代以降とみられる層が堆積するが、時期は特定できない。

第1トレンチ（北トレンチ）

農道予定地に設定されたトレンチで、北東深堀トレンチの北に位置する。北東深堀トレンチと同じく、基盤層直上に堆積する層の時期特定は困難である。

(3) 各調査区の遺物

第8トレンチ（塔基壇）

1は塔基壇盛土中から出土した須恵器杯である。取り上げ時の記録には「版築中」とある。高台が外側に踏ん張り、小谷窯跡分類(信里 2002)の杯D3または杯D4に該当する。生産地では小谷1・2号窯跡、打越窯跡出土資料と同一型式で、小谷窯跡様相3を示す。様相3は7世紀末～8世紀初頭にあたり、塔基壇構築の上限をこの時期におくことができる。

Aトレンチ（塔基壇北辺）

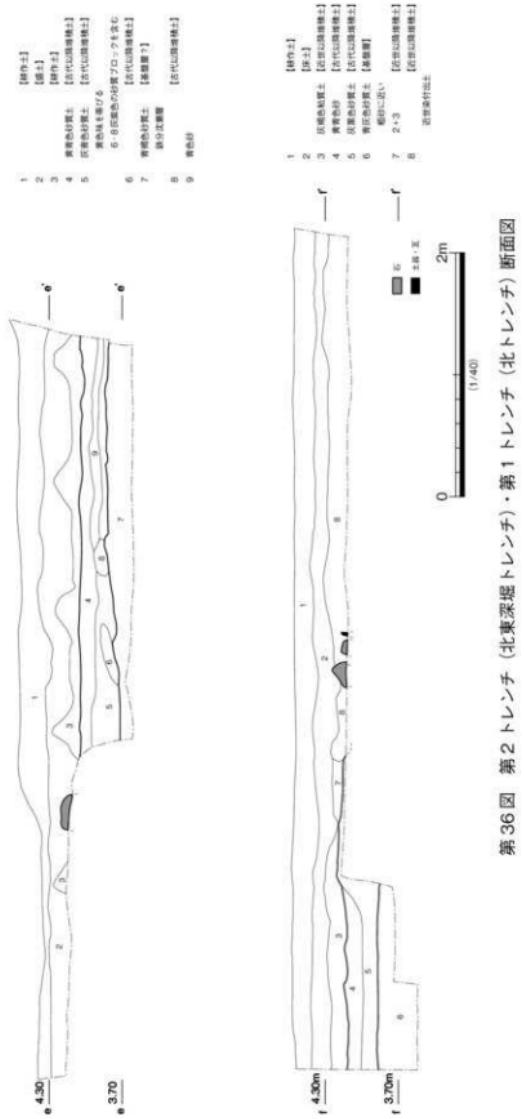
2～4の取り上げ時の記録には「4層」とあるが、この「4層」が断面図のどの層に対応するかは不明である。2は軒丸瓦でSR105（註2）である。軒丸瓦3の瓦当は失われている。4は破片だが、おそらく四重弧文軒平瓦のSR201だろう。

Dトレンチ（塔基壇北西隅）

5の須恵器甕の取り上げ時の記録には「第2層」出土とあるが、Dトレンチは断面図がないため出土位置が特定できない。

Bトレンチ（塔基壇西辺）

6～9の取り上げ時の記録には「基壇肩」または「土壇肩」とあるため、これらは推定塔基壇西辺付近からの出土と推測される。6は八葉複弁蓮華文軒丸瓦SR101で、瓦当以外は残存しない。7～9は四重弧文軒平瓦のSR201で、いずれも凹面には丁寧な板ナデが認められる。10の記録には「灰黒色粘質土」出土とあるが、断面図のどの層に対応するかは不明である。10は均整唐草文軒平瓦で、唐草の先端部が比較的しつかり巻いていることからSR203Aに該当する。頸下部と凸面には格子目タキが認められる。均整唐草文軒平瓦SR203Aと推測される11・12は、「第2層」で取り上げられている。基壇外側の古代以降の堆積土からの出土であろう。15～17は「基壇肩」で取り上げられているため、推定塔基壇西辺付近からの出土とみられる。軒平瓦16は珠文部分のみが残存し、型式の特定は難しい。平瓦



第36図 第2トレンチ(北東深掘りトレンチ)・第1トレンチ(北トレンチ)断面図

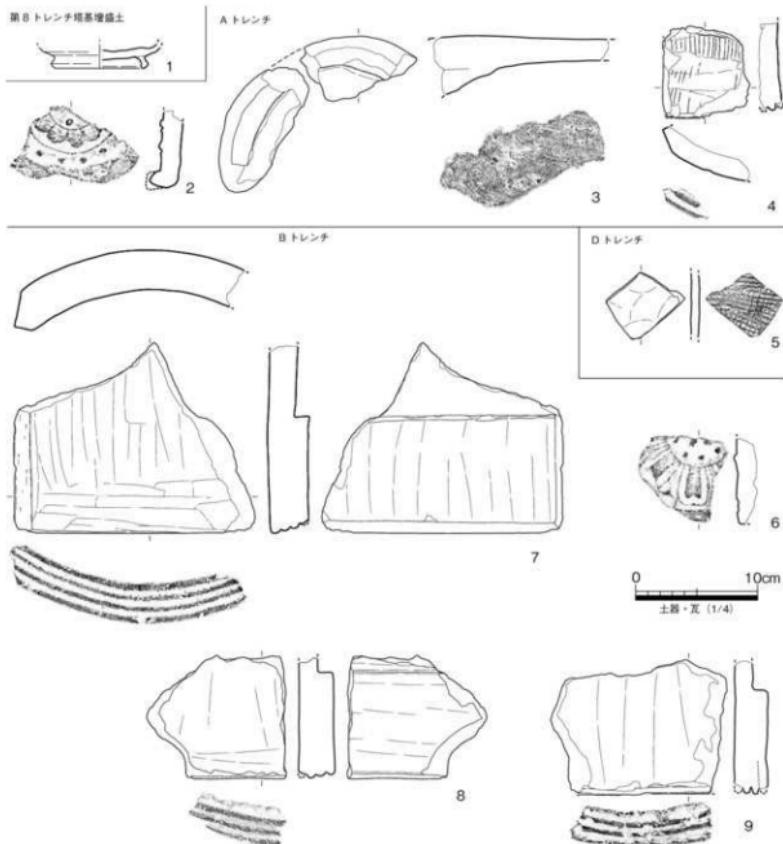
17は凸面に格子目タタキが残る。

C トレンチ（塔基壇南辺）

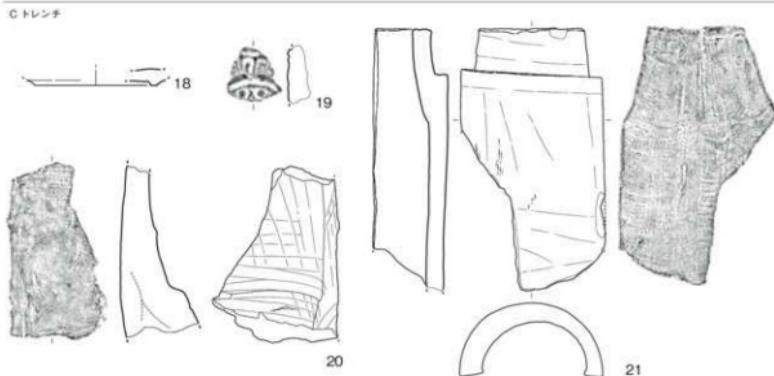
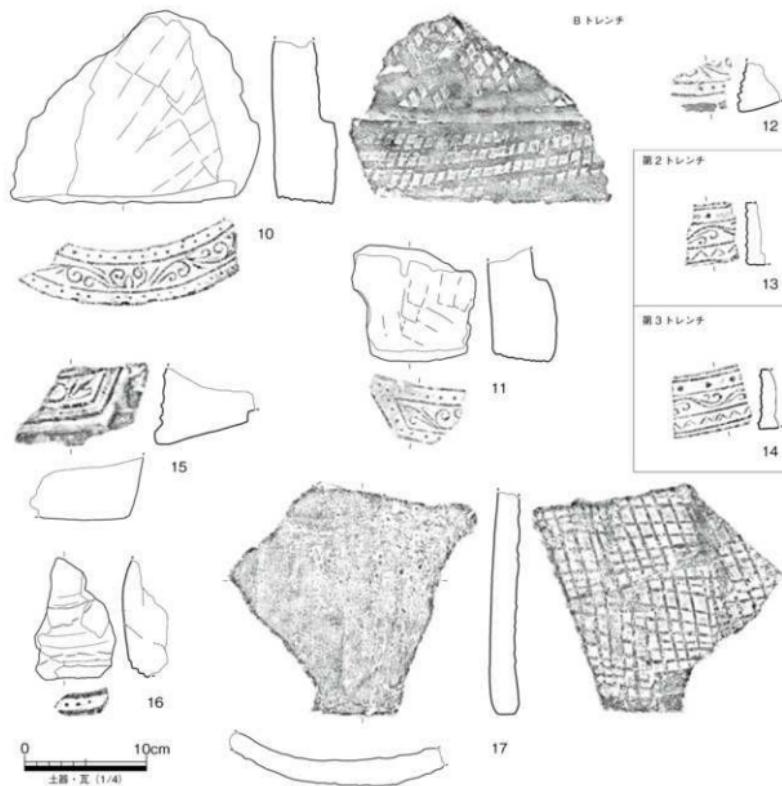
18～21の取り上げ時記録には「土壇肩」「基壇肩」とあるため、いずれも塔基壇南辺付近の出土と判断できる。18は須恵器壺の底部だろう。19は八葉複弁軒丸瓦SR102か。軒平瓦20の瓦当は剥落している。凹面には布目が残る。焼成は良好である。丸瓦21は凹面に布目が認められる。

第7トレンチ（南東コーナートレンチ、塔基壇西辺南部）

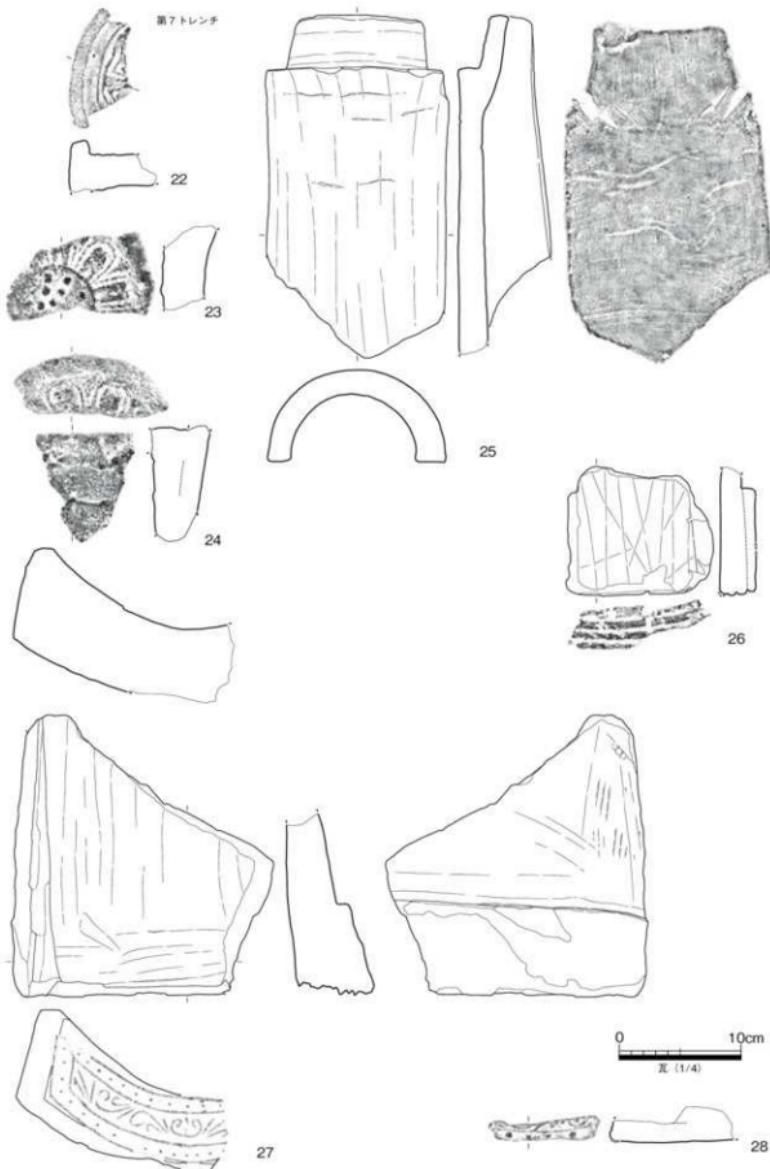
22～39の出土位置は「塔基壇南東コーナー」「南東コーナータ」「南東コーナー」のいずれかであるため、塔基壇東辺南端付近の出土と推測される。軒丸瓦22はSR102とみられる。軒丸瓦23・24は



第37図 第8トレンチ・Aトレンチ・Bトレンチ・Dトレンチ 出土遺物実測図

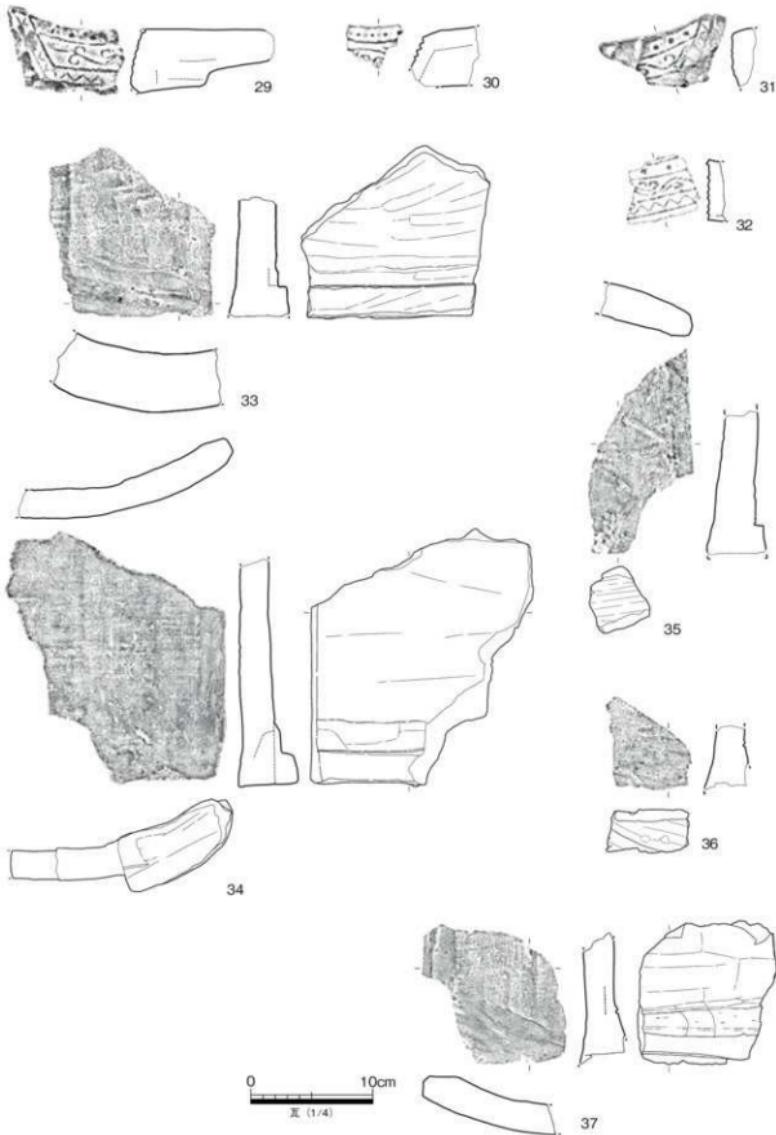


第38図 Bトレーニチ・Cトレーニチ出土遺物実測図



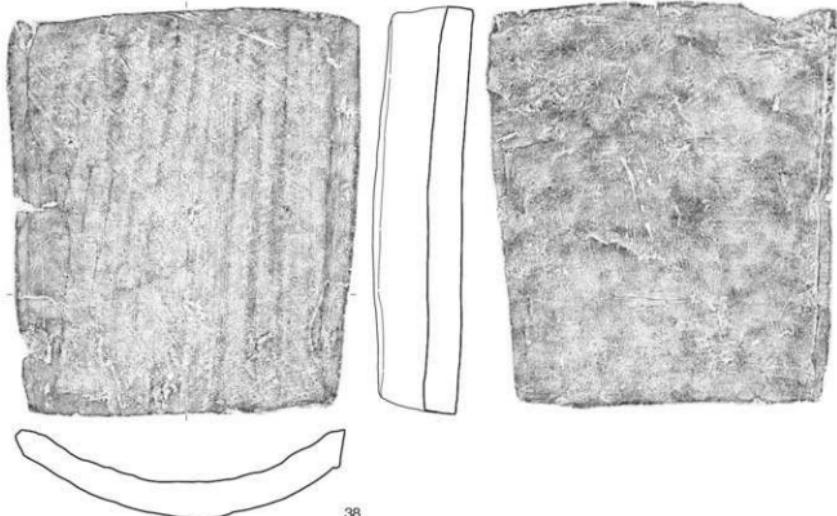
第39図 第7トレンチ 出土遺物実測図 1

第7トレンチ

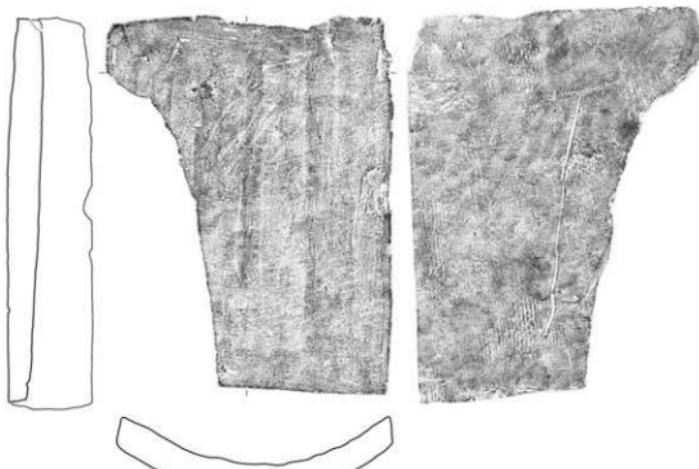


第40図 第7トレンチ 出土遺物実測図 2

第7トレンチ



38



39

0 10cm
五 (1/4)

第41図 第7トレンチ 出土遺物実測図3

SR101に近いが、子葉の形状がやや異なる。丸瓦 25 の内面には板ナデが施されるが、わずかに布目が残る。軒平瓦 26 は四重弧文の SR201 である。頸を接合したと推測される接合痕を確認できる。均整唐草文軒平瓦 27 の文様パターンは SR203C に近いが、より簡略化されている。軒平瓦 28 は、内区に唐草文、外区に殊文が配される。これまでの白鳥廃寺跡では知られていない型式である。軒平瓦 29 は、上段（外区）に珠文、中段（内区）に唐草文、下段と左右（外区）に鋸歯文が配される。これも白鳥廃寺跡での出土が知られていなかった型式である（SR205）。軒平瓦 30 は SR203A とみられる。軒平瓦 31 の文様は、上段（外区）の珠文、中段（内区）の唐草文、下段と左右（外区）の鋸歯文で構成される。29 とは唐草のパターンが異なる。32 は瓦当のみが剥落した軒平瓦で、上段（外区）珠文、中段（内区）唐草文、下段（外区）鋸歯文の文様構成となっている。29 または 31 と同一の文様かは不明である。33～37 は瓦当が剥落した軒平瓦である。平瓦 38 の凸面は縄目タタキの後、一部すり消しが行われている。39 の凸面は、板ナデにより縄目の残存は限定的である。

第3トレーニング（北東コーナートレンチ、塔基壇東辺北部）

14 は軒平瓦 SR202 とみられる。40・41・44～47 「塔土壤北東コーナー」「塔基壇北東コーナー」として取り上げられているため、塔基壇東辺北端部で検出された瓦群の一部だろう。42 は「塔土壤北東コーナー灰色土」、43 は「塔基壇北東コーナー灰色土」の取り上げである。塔基壇東辺北端部と推測されるが、「灰色土」がどの層に対応するかは不明である。40 は八葉複弁軒丸瓦 SR102 である。軒丸瓦 41 は磨滅が著しく文様は判然としないが、外区にかろうじて珠文が確認できる。白鳥廃寺跡でこれまで知られている軒丸瓦とは異なる文様の可能性がある。軒平瓦の 42・43 は、上段（外区）に珠文、中段（内区）に唐草文、下段（外区）に鋸歯文をもつ。29・42・43 は同一文様とみられる。均整唐草文軒平瓦 44 は SR203A である。頸の一部に格子目タタキが認められる。45 も SR203A の可能性がある。平瓦 46・47 は桶巻き作りで、凸面には縄目タタキが施される。

塔基壇肩（出土調査区不明）

SR203C とみられる軒平瓦 48 は「塔基壇肩」で取り上げられているが、調査区は不明である。

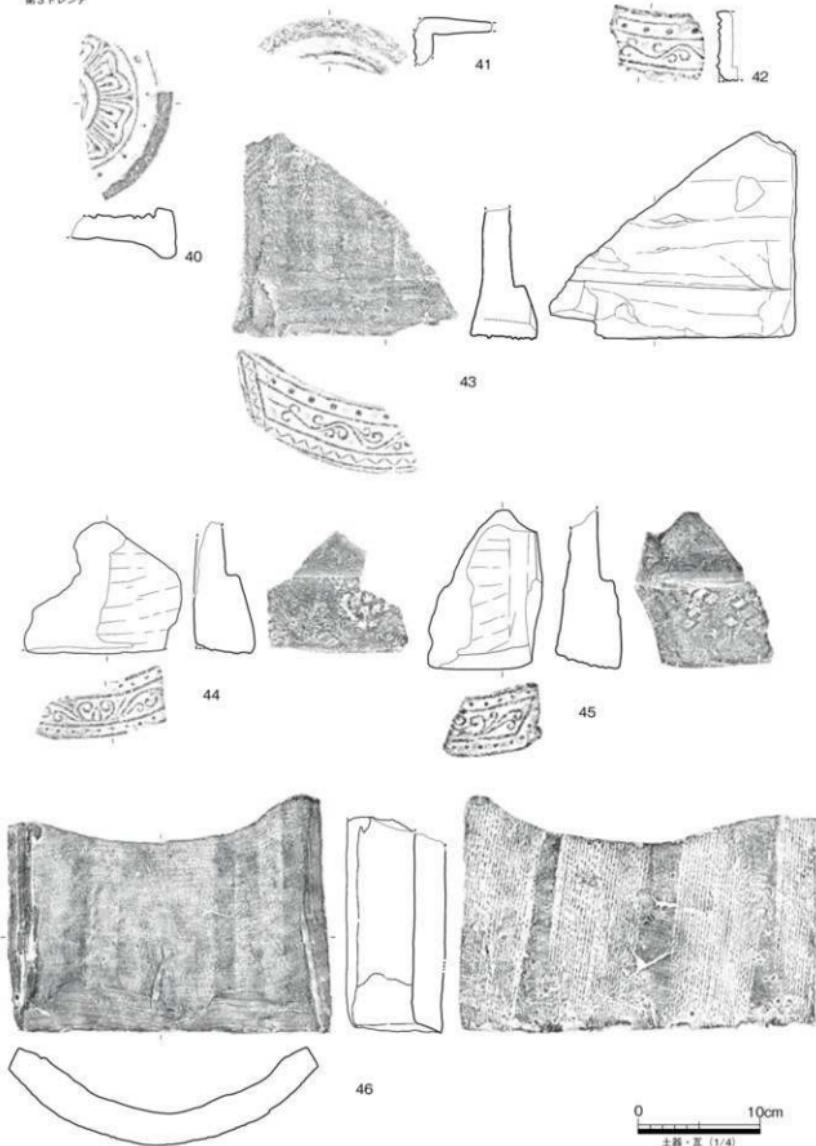
第4トレーニング（南東トレーニング、塔基壇南辺から石列）

49～56 は、取り上げ時の記録に「石列」とあるため、第4トレーニング南部で検出された石列周辺の出土だろう。ただし、「石列」が塔基壇南辺の石積を指すのであれば、これらの遺物が塔基壇に伴うことになる。50・52・54 については「石列より下の層」で取り上げられているが、第4トレーニング断面図では石列は基盤層直上にあるため、出土層位は不明である。49・50・51 は八葉複弁蓮華文軒丸瓦 SR102 である。52 は八葉複弁軒丸瓦 SR101 とみられる。53・54 は四重弧文軒平瓦 SR201 で、断面に頸の接合痕が認められる。軒平瓦 55 は小片で型式の特定が困難だが、SR203A とみたい。56 は均整唐草文軒平瓦 SR203A である。

第5トレーニング（南トレーニング）

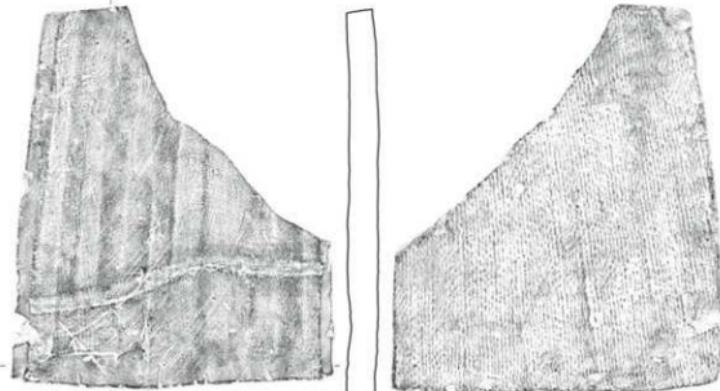
57 は「第4・5層（灰色粘土）」で取り上げられているため、第1図4・5層の古代以降堆積土中の出土と考えられる。文様は判然としないが、軒丸瓦 SR103B だろう。

第3トレンチ



第42図 第3トレンチ 出土遺物実測図

第3トレンチ



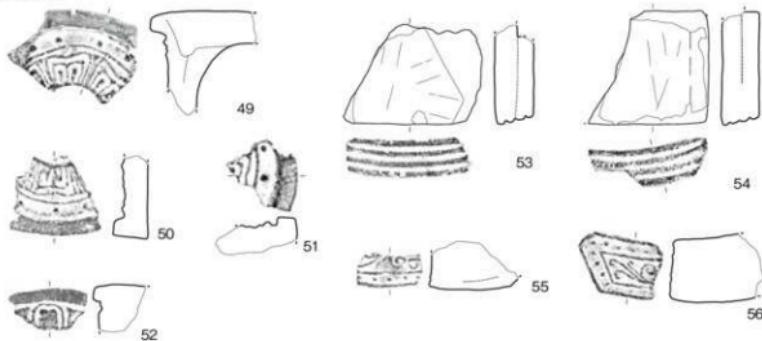
47

塔基壇肩(調査区不明)



48

第4トレンチ



49

53

54

50 51

55

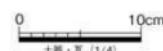
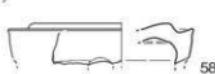
56

52

第5トレンチ



第1トレンチ



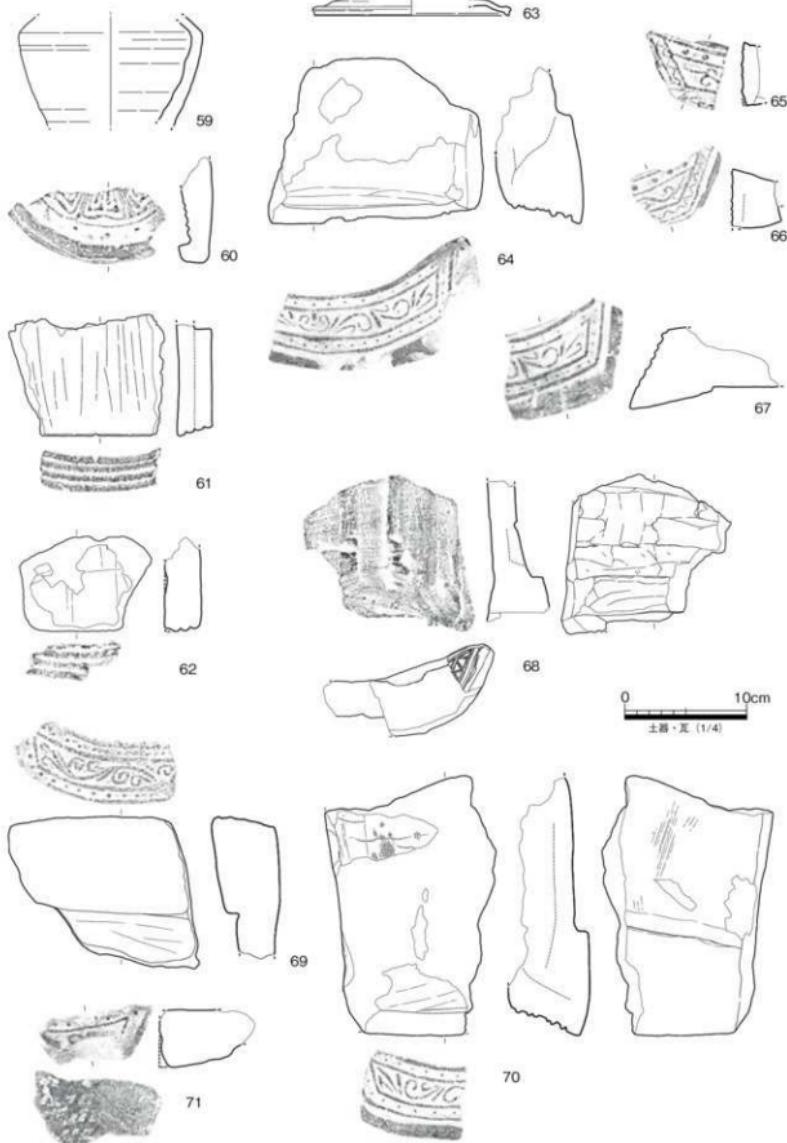
0

10cm

土路・瓦 (1/4)

第43図 第3トレンチ・塔基壇肩・第4トレンチ・
第5トレンチ・第1トレンチ 出土遺物実測図

出土調査区不明



第44図 調査区不明 出土遺物実測図1

第2トレンチ（北東深堀トレンチ）

13はSR203Aとみられる軒平瓦である。

第1トレンチ（北トレンチ）

58は須恵器観で、陸と海には自然釉がかかる。砂粒を比較的多く含む胎土で焼成は良好である。

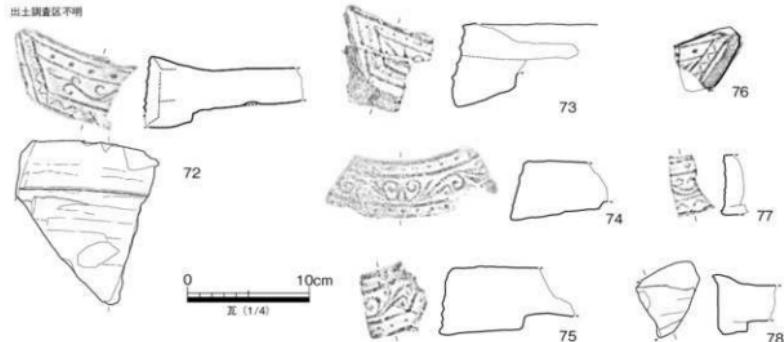
出土調査区不明

59は須恵器壺、63は須恵器蓋である。60はSR102の軒丸瓦だろう。61・62は四重弧文軒平瓦SR201で、61は頸の接合痕が認められる。64・67は均整唐草文軒平瓦SR203Bである。軒平瓦65・66・72の文様は上段（外区）に珠文、中段（内区）に唐草文、下段と左右（外区）に鋸歯文が施される。軒平瓦68の文様は、外区の左側に鋸歯文が残る。65または66・72と同文様の可能性がある。69・74・75は軒平瓦SR203Aだろう。70は軒平瓦SR203Cである。軒平瓦71の文様は判断しがたい。頸に格子目タタキが認められる。73はSR203Bの軒平瓦だろう。上段（外区）の珠文と外区左側の鋸歯文が残る76、および上段（外区）珠文、中段（内区）唐草文、下段（外区）鋸歯文で構成される77は、65・66・72と同文様の可能性もある。78は瓦当文様部分を失った軒平瓦である。

3 伽藍域を構成する施設の復元

(1) 塔基壇の復元

1968年、塔基壇は削平され、心礎以外の礎石は移動させられた。2・3次調査では、塔基壇の四辺を示す瓦群と集石が検出され、この調査成果を基にすれば塔基壇は南北13.8m（約45.5尺）、東西12.8m（約42尺）となる。集石の存在から、塔基壇は乱石積基壇であったことが推測される。第8トレンチなどの断面にみられるように、塔基壇は版築で構築される。現在、塔基壇は復元されているが、心礎のみが原位置を保っている。心礎の穴の直径は0.36mである。



第45図 調査区不明 出土遺物実測図2

(2) 西方基壇・西方建物の復元

西方基壇は1968年に一部削平を受けて、削平箇所から礎石が出土した。この後、1次調査が行われ、基壇の一部の断面図と写真が1次調査報告書に掲載されている。この断面図によれば、「地山層（黄色土層）」の上に約0.65mの盛土がある。盛土は「硬い層を含む互層状になっている点から版築とみていいだろう。また、礎石（礎石の番号は1次調査報告書と対応する）は盛土上から掘り込んで設置されている。

現在、西方基壇と周辺には19石の礎石が存在する。これらのうち、礎石1～10は少なくとも1次調査以後には動かされてはおらず、本来の位置を保っていると判断した。これら10石の礎石の位置から、基壇上に四面庇の5間×4間の東西方向に長い建物（西方建物）を復元した。身舎を構成するのは礎石1～3・10で、1間は約1.5m（5尺）である。身舎から約1.65m（5.5尺）外側に位置する礎石4～9を庇とした。ただし、南辺の礎石7、北辺の礎石8・9は身舎の礎石と柱筋がずれる。

基壇は現在の地割から北辺と西辺を推測し、南辺は残存基壇の南裾とした。東辺は西方建物の中心軸で西辺を折り返した位置である。この復元では、西方基壇は東西約15m（50尺）、南北約10.35m（34.5尺）となる。

(3) 北方基壇の復元

2013年調査では、伽藍内の現地形でもっとも標高の高い箇所にトレンチ状の8か所の調査区が設定された。これらの調査区では上下2段の方形の壇状遺構が確認され、下位の壇状遺構は東西約20m、南北約13m、上位の壇状遺構は東西約11m、南北約5mに復元されている。上位壇状遺構の南辺と北西隅には幅約1mの溝が巡り、溝から瓦と焼土、炭化物が出土している。軒瓦には、もっとも時期が下ると推測される軒丸瓦SR105を含む。上面での礎石や柱穴は確認されていない。調査時の所見によれば、約20×13mの方形基壇が形成され（先行基壇）、その後、周囲を削り落として約11×5mの方形基壇につくり替えられた（後出基壇）とされる。当該地点は標高も高く、耕作土および鶴床直下で後出基壇上面が検出されているため、基壇が中世以降の削平を受けている蓋然性は高い。このため、基壇上に礎石建物が存在していた可能性を考慮しておく必要がある。

(4) 山下岡前遺跡の概要

北方基壇の背後のやや標高が低い箇所は山下岡前遺跡として調査が行われた。北方基壇の北東には掘立柱建物SB06がある。検出されたのは調査地南際での柱穴3基のみだが、柱穴の並びが北や東に伸びないことが確実であるため、柵ではなく建物として復元した。

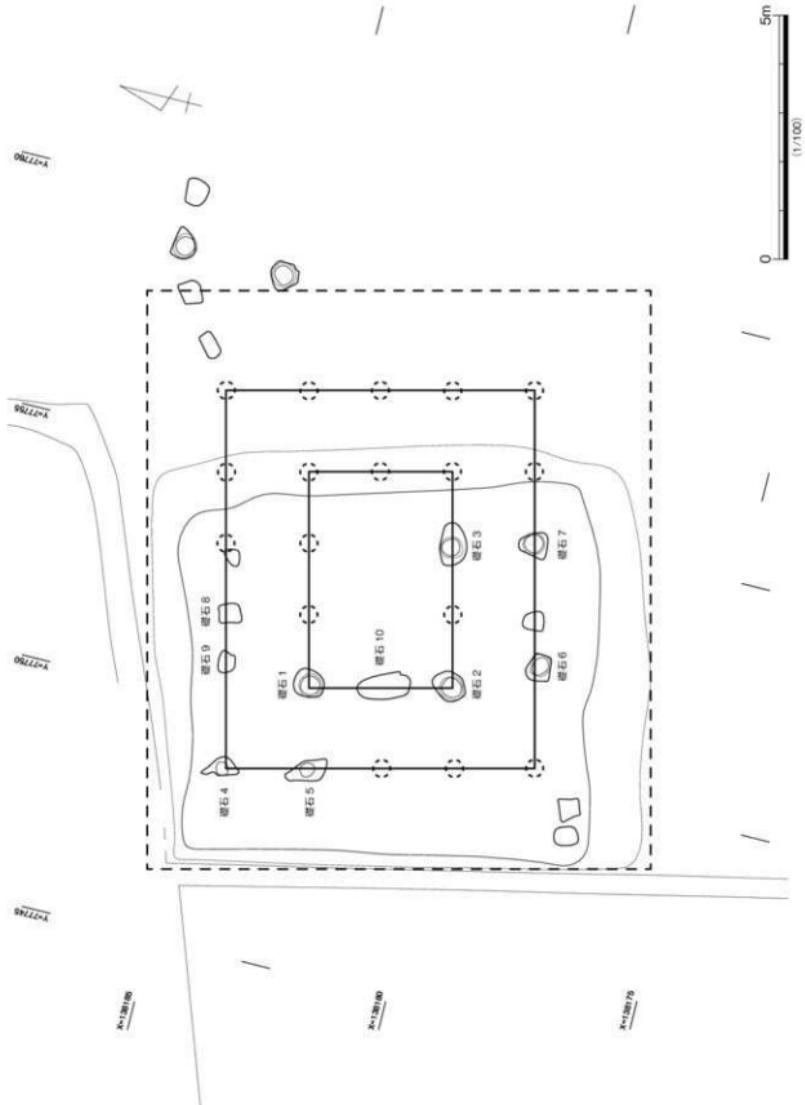
8世紀前葉に北方建物背後の谷が埋め立てによって整地された。掘立柱建物SB06は、この整地層以前に帰属するが、それ以外の掘立柱建物SB01～05、柵SA01、溝SD07は整地層上面から掘り込まれた遺構である。

北西丘陵裾近くには掘立柱建物がSB01～05が設置される。後述するが、これらの建物は柱穴の切り合いから3期に分けられる。建物群の東側にある南北方向の柵SA01は、SB03と併存し、近接するSB01・02、主軸方向を大きく違えるSB04・05とは併存しないと考えた。SA01以東に建物や柱穴が広がらないため、SA01は伽藍域東限を示す柵だろう。SA01がない時期についても、建物などはSA01



第 46 図 白鳥廃寺跡平面図

第42図 西方基壇・西方建物平面図



以西に収まるため、SA01 付近が伽藍域東限である蓋然性は高い。

本来の谷最深部に近い箇所にある南北方向の溝 SD07 は排水機能を有する溝とみられる。また、北東丘陵の南端部がカットされ東西方向の溝 SD06 が掘り込まれる。SD06 の南側になんらかの構造物が設置され、それに伴って SD06 が形成された可能性がある。

(5) その他

1 次調査で推定された南大門や中門、回廊については、現状では検討する材料がない。北方基壇の北の丘陵に窓の存在が指摘されているが、この点についても肯定する根拠は乏しい。

4 白鳥廃寺跡の伽藍配置と変遷

3までの検討を踏まえて、白鳥廃寺跡の伽藍配置と変遷を示したのが第 48 ~ 51 図である。

1 期 7 世紀末~8 世紀初頭

塔、および金堂と推定される西方建物が配置される。西方建物の時期は不明だが、塔と同一時期とみておきたい。また、建物は確認されていないが、北方基壇も同時期としておく。北方基壇の北東には、機能は不明だが掘立柱建物 SB06 がある。

2 期 8 世紀前葉~10 世紀前葉

8 世紀前葉、SB06 廃絶後に背後の谷部が埋め立てにより整地される。伽藍域から出土している遺物のうち、10 世紀前後でもっとも新しい時期を示す山下岡前遺跡出土須恵器杯(ただし造構には伴わない)から、白鳥廃寺跡の下限を 10 世紀前葉に置くことができる。このため、2 期は 8 世紀前葉~10 世紀前葉の幅でとらえられる。掘立柱建物の先後関係から 3 小期に細分されるが、各小期の時期を決定する材料はない。また、掘立柱建物の先後関係が確実なのは SB04 → SB01、SB03 → SB02、SB05 → SB02 のみである。

2-1 期

北西丘陵裾近くの掘立柱建物 SB04・05 の主軸方向は、塔基壇や西方建物のそれと大きく異なる。北西から北東にかけて傾斜する地形に合わせて建物主軸を決定した可能性がある。なお、SB04・05 と、2-2 期とした SB03 の先後関係は判然としない。2-3 期の SB01・02 と主軸方向が類似する SB03 を SB01・02 に近い 2-2 期とし、主軸方向が異なる SB04・05 をさらに古い時期と考えて 2-1 期とした。

SB04・05 の東側には、排水溝とみられる SD07 が設けられる。

2-2 期

塔基壇や西方建物と主軸方向が近い掘立柱建物 SB03 が構築される。2-1 期の SB04・05、2-3 期の SB01・02 は 2 棟セットのため、SB03 と対をなす建物が南側の未調査地に存在する可能性はある。

SB03 の東側には南北方向の溝 SA01 が設置される。建物や柱穴は SA01 以西にしか認められないため、SA01 は伽藍域東限を示す遺構とみていいだろう。

2-3 期

東辺をそろえる 2 棟の掘立柱建物 SB01・02 が設置される。SA01 が存在しなくとも SA01 付近が寺域東限を示すとみられ、SB01・02 は伽藍域東限と北西丘陵の間の空間を可能な限り利用するように配

置されている。北方基壇の縮小は、仮にこの時期としたが、2-1期や2-2期にさかのほる可能性もある。

おわりに

白鳥廃寺跡2・3次調査の報告および1次調査の再検討により、伽藍配置と変遷の提示を行った。讃岐国の古代寺院は20か所以上が知られるが、伽藍配置がある程度判明しているのは、讃岐国分寺跡、讃岐国分尼寺跡、開法寺跡のみである。白鳥廃寺跡も調査は行われていたものの、そのデータの公開は一部にとどまり、伽藍配置は1次調査時のイメージが独り歩きしていた感が否めない。こうしたなか、限られたデータからの復元ではあるが、白鳥廃寺跡の伽藍配置を提示する意義は大きいと考える。ただし、推測に基づく箇所も多く、遺構、遺物の解釈や、今後の調査によっては本稿での提示案が変更される余地があることを強調しておく。

調査一覧

白鳥廃寺跡1次調査：1968年12月～1969年1月（昭和43年度）

白鳥廃寺跡2次調査：1953年2～3月（昭和57年度）

白鳥廃寺跡3次調査：1953年5月（昭和58年度）

白鳥廃寺跡2013年調査：2013年2月～3月（平成24年度）

山下岡前遺跡1次調査：2012年11月～2013年3月（平成24年度）

註

1 1は、六車（1969）、藤井ほか（1970）、発掘調査時の写真と日誌、当時の新聞記事などを参考に構成した。なお、写真と日誌は大川広域行政組合で保管されている。

2 軒瓦の分類は、高松市歴史資料館編（1996）を用いる。

参考文献

阿河鏡二 2014 「県指定史跡 白鳥廃寺跡」香川県教育委員会編『香川県文化財年報 平成24年度』香川県教育委員会,pp.88

伊沢肇一・大山真充 1983「白鳥廃寺」香川県教育委員会編『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』香川県教育委員会,pp.7-11
大山真充・松野一博 1984「白鳥廃寺（第3次）」香川県教育委員会編『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』香川県教育委員会,pp.9-10

高松市歴史資料館編 1996「第11回特別展 讃岐の古瓦展」高松市歴史資料館

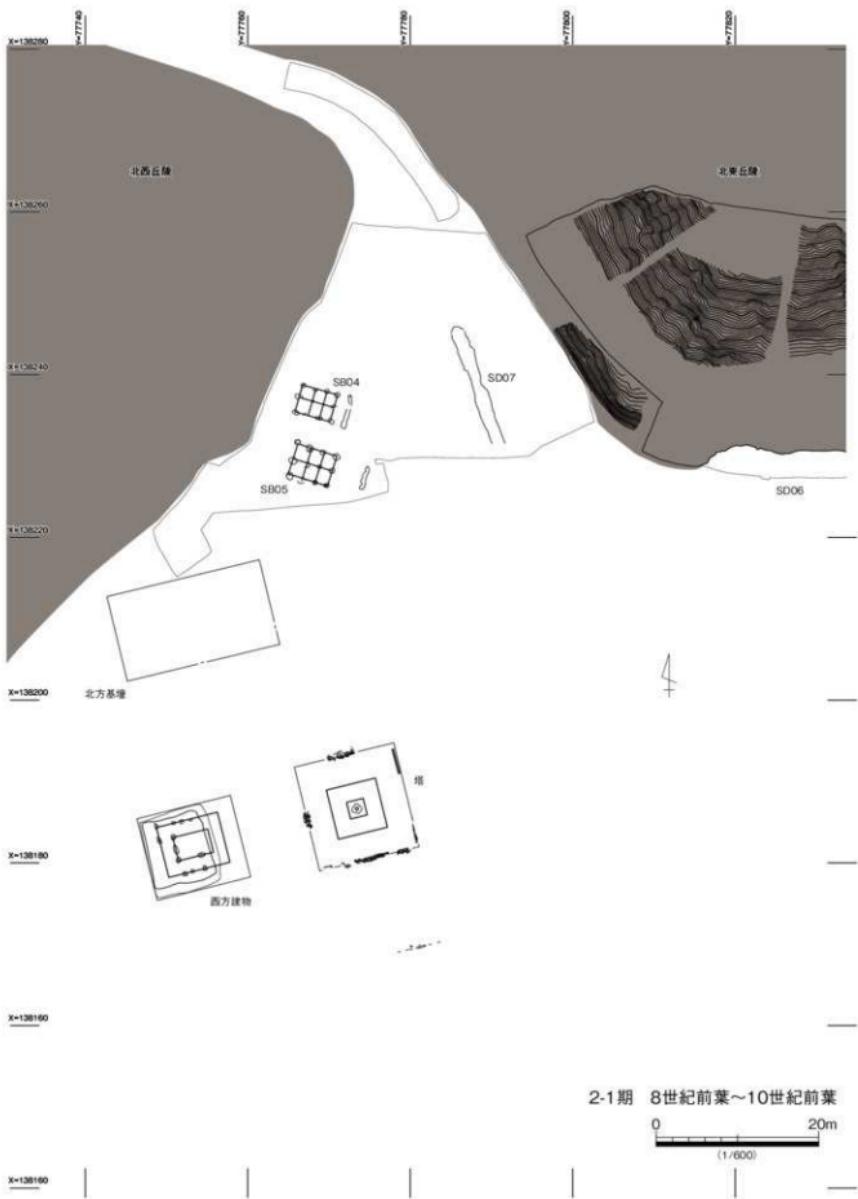
信里芳紀 2002「小谷窯跡出土須恵器の編年」財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編『高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う理藏文化財発掘調査報告 小谷窯跡・塚谷古墳』香川県教育委員会ほか,pp.199-221

藤井直正・六車恵一・溝潤茂樹 1970「讃岐白鳥廃寺跡調査報告 一昭和43年度一」白鳥廃寺跡発掘調査團、白鳥町文化財保護協会

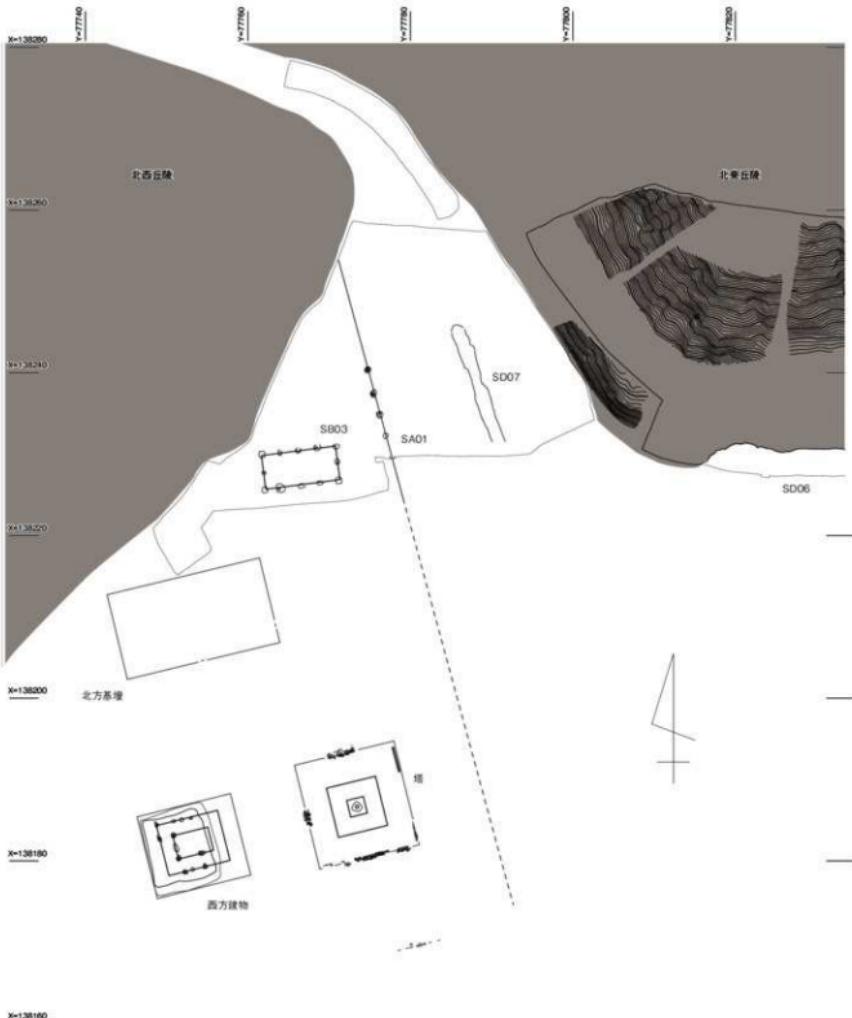
六車恵一 1969「白鳥廃寺発掘調査概要」『文化財協会報』52,香川県文化財保護協会,pp.4-5



第48図 白鳥廃寺跡 伽藍配置変遷図 1期



第49図 白鳥廃寺跡 伽藍配置変遷図 2-1期



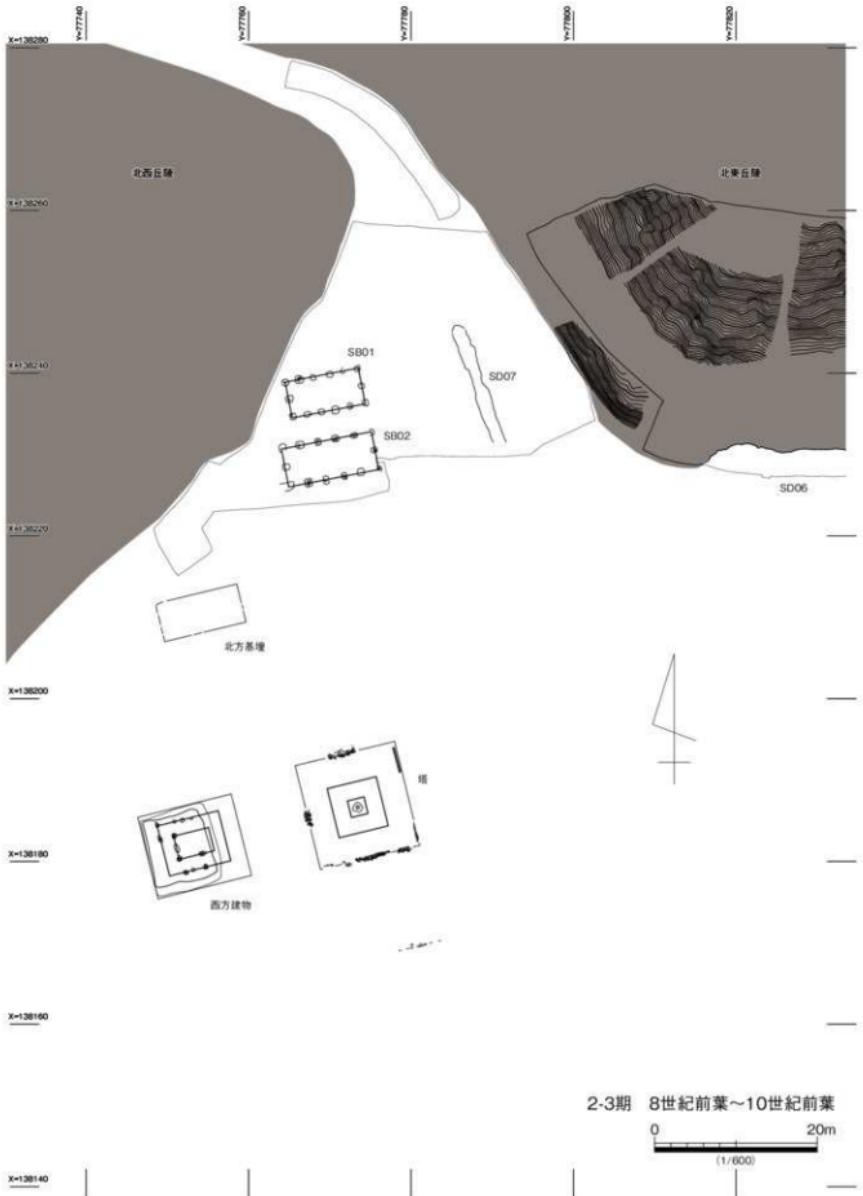
第50図 白鳥廃寺跡 伽藍配置変遷図 2-2期

2-2期 8世紀前葉～10世紀前葉

8

20m

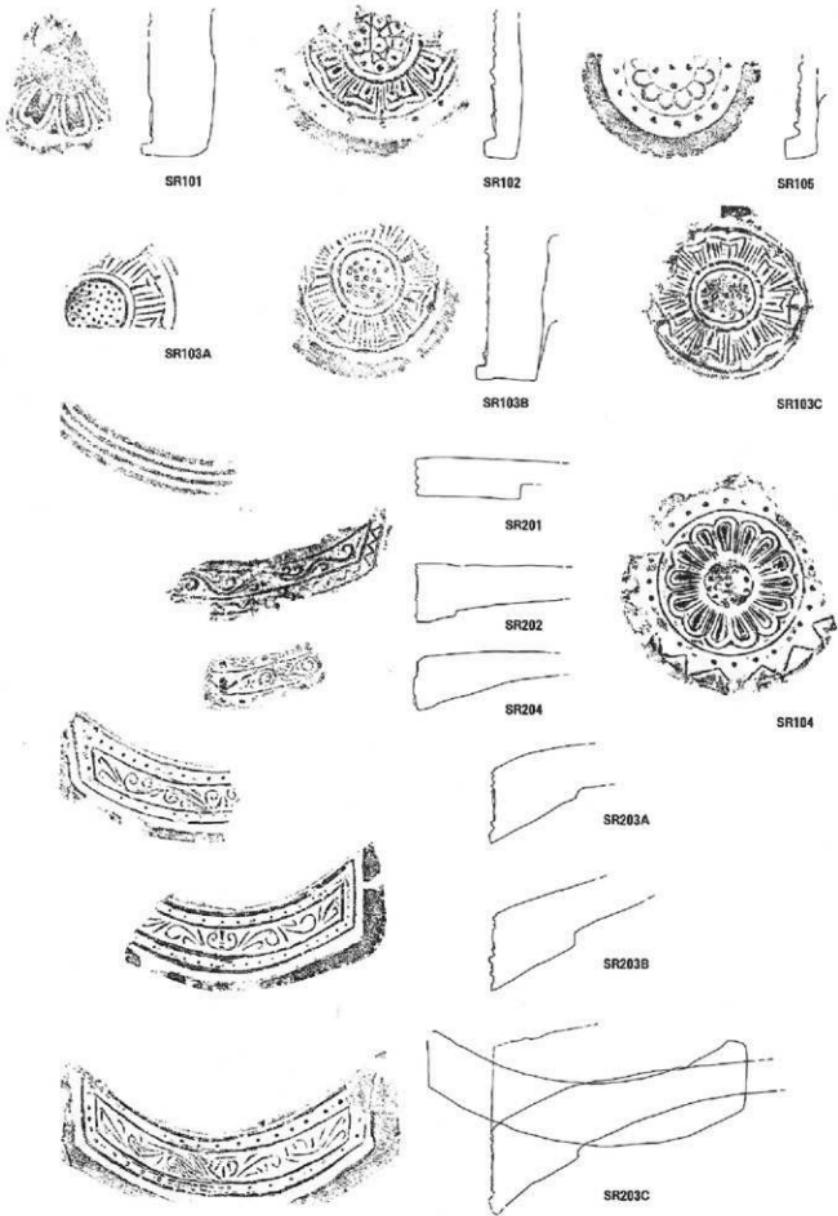
15-0000



第 51 図 白鳥寺跡 伽藍配置変遷図 2-3 期

2-3期 8世紀前葉～10世紀前葉





第 52 図 白鳥廃寺跡 軒瓦分類 (S=1/4 高松歴史資料館編 1996)

第24表 白鳥庵寺跡出土瓦觀察表

剖面番号	遺構名	形態	白色部分 黒色部分	灰色部分	全長(復作長) (cm)	幅(復作幅) (cm)	厚さ(cm)	法量		調整		色調
								凸面	凹面	凸面	凹面	
2	Aトレンチ	軒丸瓦	繩少	繩少	-	-	-	-	-	-	-	N6/灰
3	Aトレンチ	軒丸瓦	中少	繩少	-	-	-	1.8	-	板ナギ	-	10Y7.1灰白
4	Aトレンチ	軒丸瓦	繩少	-	-	-	-	-	-	-	-	NS/灰 (美)NS/灰
6	Bトレンチ	軒丸瓦	-	繩少	-	-	-	-	-	-	-	(美)B7.4灰、黄 (美)B7.4灰、黄
7	Bトレンチ	軒丸瓦	中少	-	(135)	(197)	2.3	-	-	板ナギ	25Y7.2灰黄	2.5Y6.1灰
8	Bトレンチ	軒丸瓦	繩少	-	(10.1)	(11.4)	1.5	-	-	板ナギ	10Y7.1灰白	7.5Y7.1灰白
9	Bトレンチ	軒丸瓦	繩少	-	(11.1)	(14.0)	1.5	-	-	板ナギ	25Y7.2灰黄	2.5Y7.2灰黄
10	Bトレンチ	軒丸瓦	繩少	中小	(15.7)	(20.4)	3.6	-	-	板ナギ	NS/灰	NS/灰
11	Bトレンチ	軒丸瓦	-	中多	(9.5)	(10.2)	3.6	-	-	板ナギ	25Y6.1灰灰	2.5Y7.2灰白
12	Bトレンチ	軒丸瓦	繩少	-	-	-	-	-	-	-	-	(美)10Y8.1灰白 (美)10Y8.1灰白
13	第3トレンチ	軒丸瓦	繩少	-	繩少	-	-	-	-	-	-	10Y5.7.2灰黄 (美)10Y5.7.2灰黄
14	第3トレンチ	軒丸瓦	繩少	-	繩少	-	-	-	-	-	-	7.5Y7.1灰白
15	Bトレンチ	軒丸瓦	繩少	繩少	-	-	-	-	-	-	-	7.5Y7.1灰白
16	Bトレンチ	軒丸瓦	-	繩少	(10.0)	(6.6)	-	-	-	板ナギ	-	2.5Y7.4灰黄
17	Cトレンチ	軒丸瓦	中少	繩少	(18.8)	(20.1)	2.1	-	-	板ナギ	(美)10Y8.4浅青 (美)10Y8.4浅青	(美)10Y8.4浅青
19	Cトレンチ	軒丸瓦	繩少	繩少	-	-	-	-	-	-	-	2.5Y7.4灰黄
20	Cトレンチ	軒丸瓦	繩少	-	(14.5)	(10.4)	3.2	-	-	板ナギ	布目	(美)NS/灰 (美)NS/灰
21	Cトレンチ	丸瓦	繩少	繩少	(21.5)	(11.6)	1.6	-	-	板ナギ (美)板ナギ	7.5Y6.1灰	10Y7.1灰白
22	第7トレンチ	軒丸瓦	繩少	-	繩少	-	-	-	-	-	-	(美)10Y6.1灰 (美)10Y6.1灰
23	第7トレンチ	軒丸瓦	中少	-	中小	-	-	-	-	-	-	(美)10Y7.3灰黄 (美)10Y7.3灰黄
24	第7トレンチ	軒丸瓦	繩少	繩少	-	-	-	-	-	板ナギ	5Y6.1灰	5Y7.1灰白
25	第7トレンチ	軒丸瓦	中少	繩少	(28.0)	(14.8)	2.4	-	-	板ナギ	10Y7.1灰白	10Y7.1灰白
26	第7トレンチ	軒丸瓦	繩少	-	(10.5)	(12.1)	2.9	-	-	板ナギ	板ナギ (美)NS/灰白	(美)NS/灰白
27	第7トレンチ	軒丸瓦	中少	繩少	(23.1)	(21.3)	4.1	-	-	板ナギ	7.5Y7.1灰白	5Y6.1灰
28	第7トレンチ	軒丸瓦	中少	繩少	-	-	-	-	-	板ナギ	2.5Y8.2灰白	2.5Y8.2灰白
29	第7トレンチ	軒丸瓦	繩少	-	-	-	-	-	-	不明	5Y7.1灰白	5Y7.1灰白
30	第7トレンチ	軒丸瓦	繩少	中小	-	-	-	-	-	-	-	5Y6.1灰 (美)5Y7.2灰白
31	第7トレンチ	軒丸瓦	繩少	繩多	-	-	-	-	-	-	-	10Y7.1灰白
32	第7トレンチ	軒丸瓦	繩少	-	-	-	-	-	-	-	-	(美)NS/灰 (美)NS/灰
33	第7トレンチ	軒丸瓦	繩少	中小	(14.1)	(14.8)	3.2	-	-	板ナギ	5Y8.1灰白 (美)5Y8.1灰白	3Y7.1灰白
34	第7トレンチ	軒丸瓦	繩少	繩少	(19.5)	(17.6)	2.7	-	-	板ナギ	10Y8.4/5灰黄 (美)10Y8.4/5灰黄	2.5Y7.2灰白
35	第7トレンチ	軒丸瓦	繩少	-	(14.6)	(7.6)	3.0	-	-	板ナギ	5Y7.2灰白	2.5Y7.1灰白

標本番号	通称名	基種	白色砂粒	黑色砂粒	灰色砂粒	全長 (頭鰭長) (cm)	幅 (頭鰭幅) (cm)	厚さ (cm)	頭蓋		背面
									前	後	
36	第7トレンド	軒平瓦	細多	-	-	(114)	(112)	-	板ナメ	布目	5Y7/1灰白
37	第7トレンド	軒平瓦	細少	-	-	-	-	-	板ナメ	布目	5Y6/1灰 N4/灰
38	第7トレンド	中瓦	中小	細少	-	348	275	2.5	板ナメ	布目	2S7/2灰黃
39	第7トレンド	平瓦	細少	-	-	319	227	2.5	圓口タキの 板ナメ	布目	5Y7/1灰白
40	第3トレンド	軒丸瓦	-	細少	細少	-	-	-	-	-	(表)5Y6/1灰 N5/1灰白
41	第3トレンド	軒丸瓦	中少	細少	細少	-	-	1.2	不明	-	7S7/1灰白
42	第3トレンド	軒平瓦	細少	-	細多	-	-	-	-	-	(表)5Y6/2灰白 N5/1灰白
43	第3トレンド	軒平瓦	細少	細少	細少	(169)	(202)	2.3	板ナメ	布目	10Y8/4灰 7S7/6銀
44	第3トレンド	軒平瓦	細少	中多	中多	(108)	(121)	-	格子目	板ナメ	7S7/1灰白
45	第3トレンド	軒丸瓦	細少	中少	中少	(120)	(86)	2.3	格子目	板ナメ	7S7/1灰白
46	第3トレンド	中瓦	細少	-	細少	(203)	(260)	2.6	圓口タキ	布目	N5/灰
47	第3トレンド	平瓦	細少	-	細少	319	245	2.6	圓口タキ	布目	7S7/1灰白
48	等基頭冠(鱗 骨)不明	軒平瓦	細少	細多	-	-	-	-	-	-	(表)6Y7/2灰白 1素
49	第4トレンド	軒丸瓦	-	細少	中多	-	-	-	-	-	2S7/1灰白
50	第4トレンド	軒丸瓦	中少	-	-	-	-	-	-	-	(表)6Y7/1灰白 1素
51	第4トレンド	軒丸瓦	-	細多	-	-	-	-	-	-	5Y7/1灰白
52	第4トレンド	軒丸瓦	細少	-	細少	-	-	-	-	-	(表)5Y7/1灰白
53	第4トレンド	軒平瓦	細多	細少	-	-	-	-	板ナメ	NS/灰	10Y8/4灰 等基頭冠 骨)不明
54	第4トレンド	軒平瓦	中多	細多	細少	-	-	-	-	-	2S7/1灰白 N5/灰
55	第4トレンド	軒平瓦	細少	細少	-	-	-	-	-	-	(表)5Y5/1銀灰
56	第4トレンド	軒平瓦	細少	-	細少	-	-	-	不明	-	10Y8/3灰黃
57	第5トレンド	軒丸瓦	細少	細多	-	-	-	-	-	-	5Y7/1灰白 N5/灰
60	調査不明	軒丸瓦	細少	細少	-	-	-	-	-	-	5Y7/4灰 N3/銀灰
61	調査不明	軒平瓦	中少	-	細少	(99)	(128)	-	板ナメ	NS/灰	5Y6/1灰 N3/銀灰
62	調査不明	軒平瓦	細少	細少	細少	(78)	(108)	-	不明	板ナメ	10Y6/1灰 N5/灰
64	調査不明	軒平瓦	中少	細少	細少	(135)	(177)	-	-	-	2S7/3淡黃 N5/灰
65	調査不明	軒平瓦	細多	-	-	-	-	-	-	-	NS/灰
66	調査不明	軒平瓦	細少	-	細少	-	-	-	-	-	5Y7/2灰白 N5/灰
67	調査不明	軒平瓦	細少	-	細少	-	-	-	-	-	2S7/2灰白 N5/灰
68	調査不明	軒平瓦	細少	細少	細少	(131)	(139)	2.2	板ナメ	布目	NS/灰 5Y7/1灰白
69	調査不明	軒平瓦	細多	中多	中多	(125)	(156)	3.1	板ナメ	布目	2S7/4灰 N5/灰
70	調査不明	軒平瓦	細少	細少	細少	(214)	(139)	-	板ナメ	布目	7S7/1灰白 N5/灰
71	調査不明	軒平瓦	-	細多	(85)	(101)	-	-	格子目	不明	10Y6/1灰 7S7/1灰白

鉢文番号	遺物名	器種	断土			法量 (全長(保存長) 幅(保存幅)) (cm)	厚さ (cm)	調査		
			白色砂粒	黑色砂粒	褐色砂粒			凸面	凹面	板ナデ
72	調査不明	軒平瓦	繊少	繊少	繊少	(135) (118)	2.9	-	-	5Y7/2灰白
73	調査不明	軒平瓦	繊少	繊少	繊少	-	-	-	-	(4素)10Y8R/2灰白
74	調査不明	軒平瓦	中多	中多	中多	-	-	-	-	2.5Y7/3灰黄
75	調査不明	軒平瓦	中少	中少	中少	-	-	-	-	2.5Y7/2灰黄
76	調査不明	軒平瓦	繊少	繊少	繊少	-	-	-	-	5Y8/4灰・白
77	調査不明	軒平瓦	繊少	繊少	繊少	-	-	-	-	5Y8/4灰・白
78	調査不明	軒平瓦	繊少	繊少	繊少	-	-	-	-	1素15Y8/1灰白

第25表 白鳥寺跡出土土器觀察表

鉢文番号	遺物名	器種	調査			色調	法量 (内部 外部) (cm)	調査		
			内面	外面	底面			口径 (cm)	脚高 (cm)	脚幅 (cm)
1	第8トレンチ	埴輪各 種	杯 筒形器	杯 筒形器	筒形器ナデ	N6/灰	N7/灰白	石英・長石 角閃石 雲母	砂粒	7.0
5	Dトレンチ	埴輪各 種	-	-	筒形器ナデ	N6/灰	N6/灰	-	-	-
18	Cトレンチ	埴輪各 種	筒形器	筒形器	筒形器ナデ	N6/灰	N7/灰白	-	-	1.8未満
58	第1トレンチ	埴輪各 種	筒形器	筒形器	筒形器ナデ	N5/灰 N2/黑	N6/灰 N7/灰白	繊少	-	1.0(0)
59	調査不明	埴輪各 種	筒形器	筒形器	筒形器ナデ	N7/灰白	N6/灰	-	-	1.5(2)
63	調査不明	埴輪各 種	筒形器	筒形器	筒形器ナデ	15Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	-	-	0.0(0)

写真 52
2 次調査
遠景
(南西から)



写真 53
2 次調査
遠景
(西から)



写真 54
2 次調査
南トレンチ調査状況
(南から)



写真 55
2 次調査
南東トレンチ調査状況
(南から)



写真 56
2 次調査
南東トレンチ調査状況
(南から)



写真 57
2 次調査
列石
(南から)



写真 58
2 次調査
列石
(西から)



写真 59
2 次調査
塔基壇東部 瓦



写真 60
2 次調査
塔基壇南辺調査状況
(南から)



写真 61
2 次調査
塔基壇南辺調査状況
(東から)



写真 62
2 次調査
塔基壇南辺石積
(南から)



写真 63
2 次調査
塔基壇南辺石積
(南から)



写真 64
2 次調査
塔基壇南辺石積・瓦
(西から)



写真 65
2 次調査
塔基壇南辺石積・瓦
(東から)



写真 66
2 次調査
塔基壇南辺 石積・瓦
(南から)



写真 67
2 次調査
塔基壇南辺 断面
(西から)



写真 68
2 次調査
塔基壇南東隅 石積・瓦
(南から)



写真 69
2 次調査
塔基壇東辺 瓦
(北から)



写真 70
2 次調査
塔基壇東辺 瓦
(南から)



写真 71
2 次調査
塔基壇東辺 調査状況
(北から)



写真 72
2 次調査
塔基壇南辺・東辺
(南から)



写真 73
2 次調査
塔基壇南辺・東辺 石積
(南から)



写真 74
2 次調査
塔基壇東辺 石積
(東から)



写真 75
2 次調査
塔基壇南辺・東辺 石積
(北から)



写真 76
2 次調査
石列
(南から)



写真 77
2 次調査
塔基壇面
(南から)



写真 78
2 次調査
軒平瓦出土状況



香川県埋蔵文化財センター年報

令和元年度

2021（令和3）年 3月18日 発行

編集・発行 香川県埋蔵文化財センター

〒 762-0024

香川県坂出市府中町南谷 5001 番地 4

電話 (0877) 48 - 2191

FAX (0877) 48 - 3249

印 刷 株式会社 中央印刷所